

# 第1章 宍粟市の概要

## 1. 自然的・地理的環境

### (1) 位置・面積

本市は兵庫県中西部に位置し、岡山県及び鳥取県の県境に接します。隣接する市町は、北に位置する養父市より時計回りに朝来市、神崎郡神河町、姫路市、たつの市、佐用郡佐用町、岡山県美作市、英田郡西粟倉村、鳥取県八頭郡若桜町です。

広域には、京阪神と中国地方を東西に結ぶ中国縦貫自動車道と、山陽・山陰を南北に結ぶ国道29号が交わる西播磨内陸の交通の要衝であり、中国縦貫自動車道山崎インターから姫路市まで約30km、神戸まで約100km、大阪まで約140kmに位置します。

本市域は東西約32km、南北約42kmに達し、総面積は658.54km<sup>2</sup>と兵庫県土面積の7.8%を占め、豊岡市に次いで県内第2位の市域を有しています。

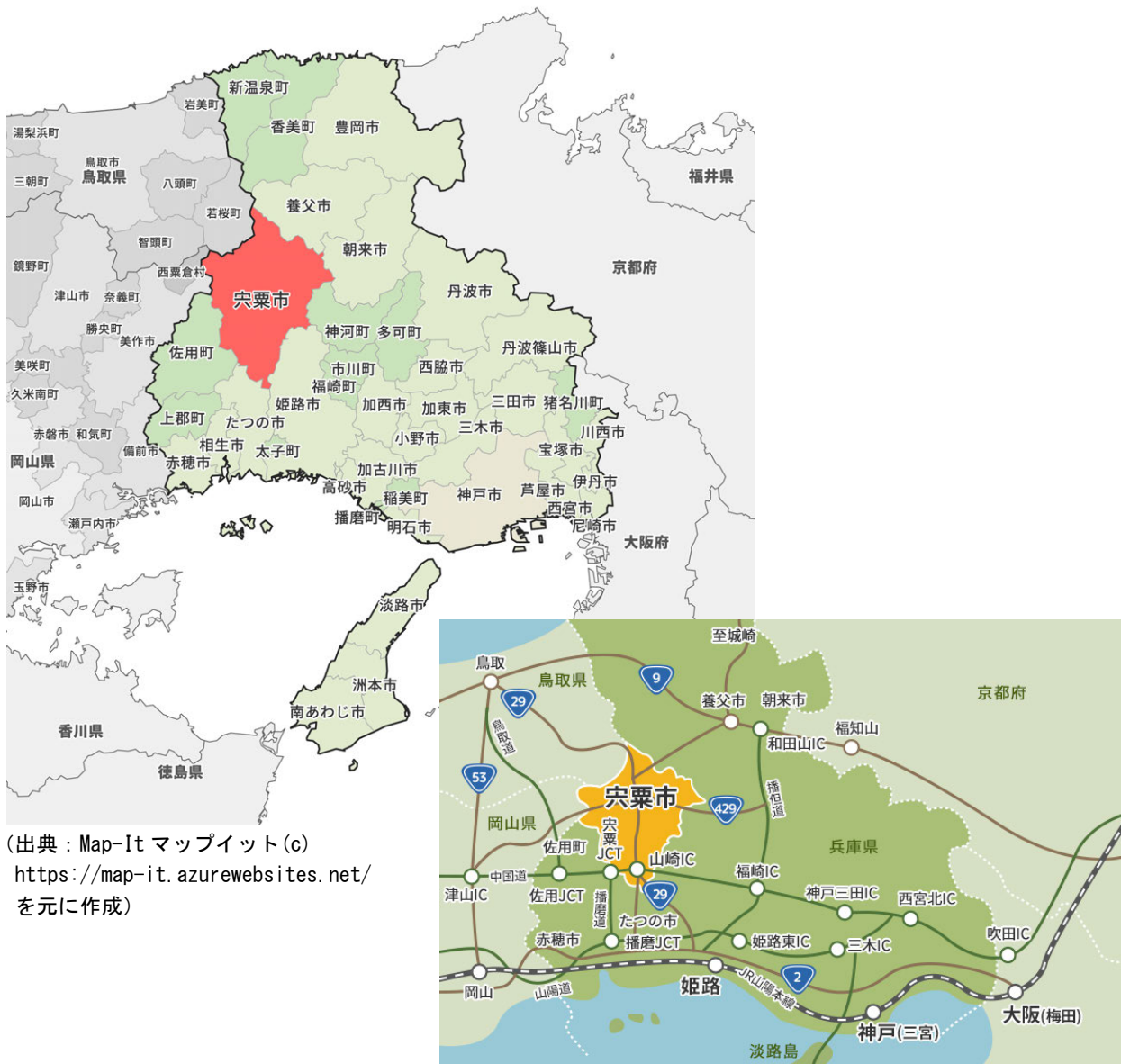


図1-1 宍粟市の位置及びアクセス

## (2) 地形・地質

### 1) 地形及び流域

本市は、中国山地東端に広がる、県下最大の面積をもつ播但山地に含まれ、大部分が急峻な山地地形を呈しています。市最北部に位置する氷ノ山三ノ丸（標高1,464m）をはじめ、三室山（標高1,358m）、後山（標高1,344m）といった、1,000m級の県下に名立たる名峰が周囲を取り巻きます。千町ヶ峰（標高1,141m）や笠杉山（標高1,032m）、黒尾山（標高1,025m）等の山頂部は平坦であり、これはかつて侵食により平坦化した地形が、その後の地殻運動により隆起してできたものです。

市域は概ね北が高く南が低い形状となっており、山崎町付近を山崎断層帯が東西に横断しています。断層を境として、北には大～小起伏の播但山地の中央山地が、南には小起伏の西播山地が位置します。それら山に囲まれた盆地一帯はかつて城下町として栄え、現在は中心市街地として、本市の発展に重要な役割を果たしています。

播但山地に源を發し市域を流下する河川は、揖保川水系と千種川水系に分かれ、ともに北から南に流下し、南北方向に狭長な谷底平野を形成します。

揖保川は藤無山を源とし、一宮町南部で波賀町を流れて来た引原川と合流し、染河内川、伊沢川、菅野川等の支流を合わせて南下し、たつの市を経て姫路市網干区で瀬戸内海に注ぎます。一宮町及び波賀町は揖保川源流域から上流域、山崎町は中流域にあたります。

千種川は兵庫県、岡山県、鳥取県の県境、江浪峠を源とし、岩野辺川、西山川等と合流し佐用町、上郡町を経て赤穂市で瀬戸内海に注ぎます。千種町は千種川上流域にあたります。

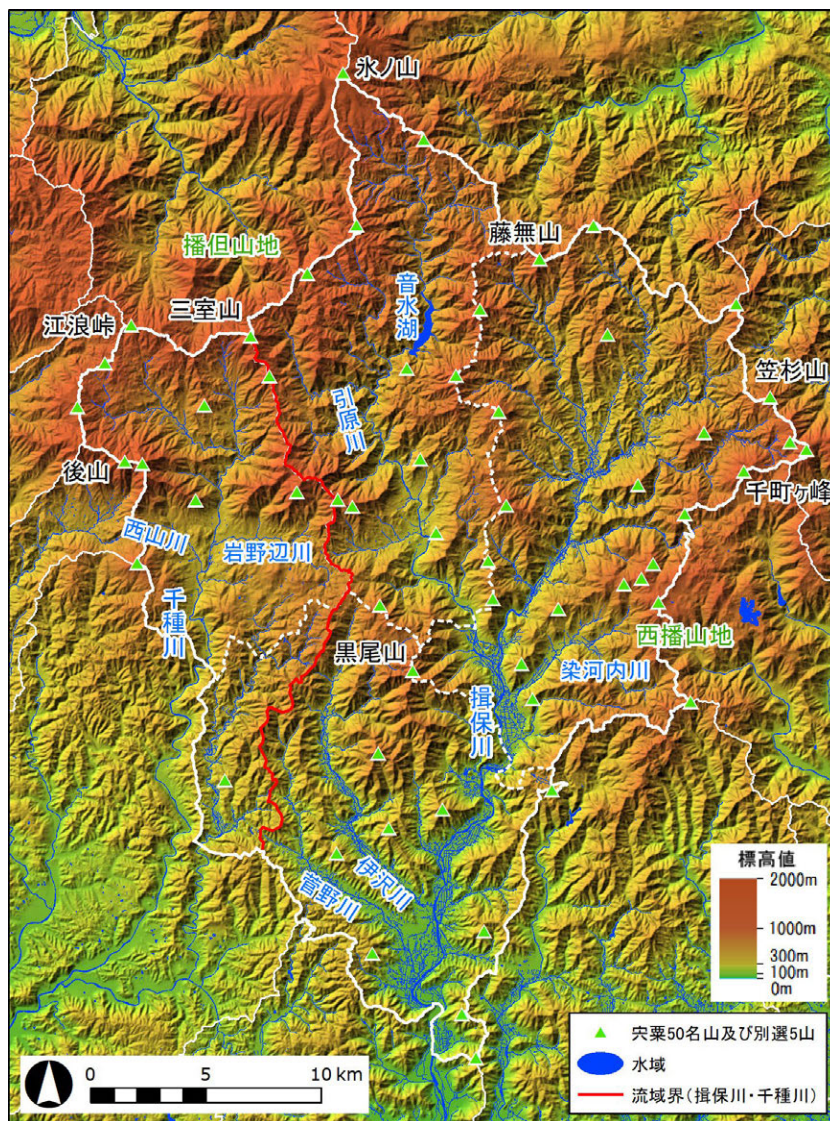


図1-2 地形及び流域

(出典: 色別標高図(国土地理院)、国土数値情報(国土交通省)  
[水域][流域界]を元に作成)

## 2) 地質

地質は、主に時代の異なる2群の岩石に分けられます。

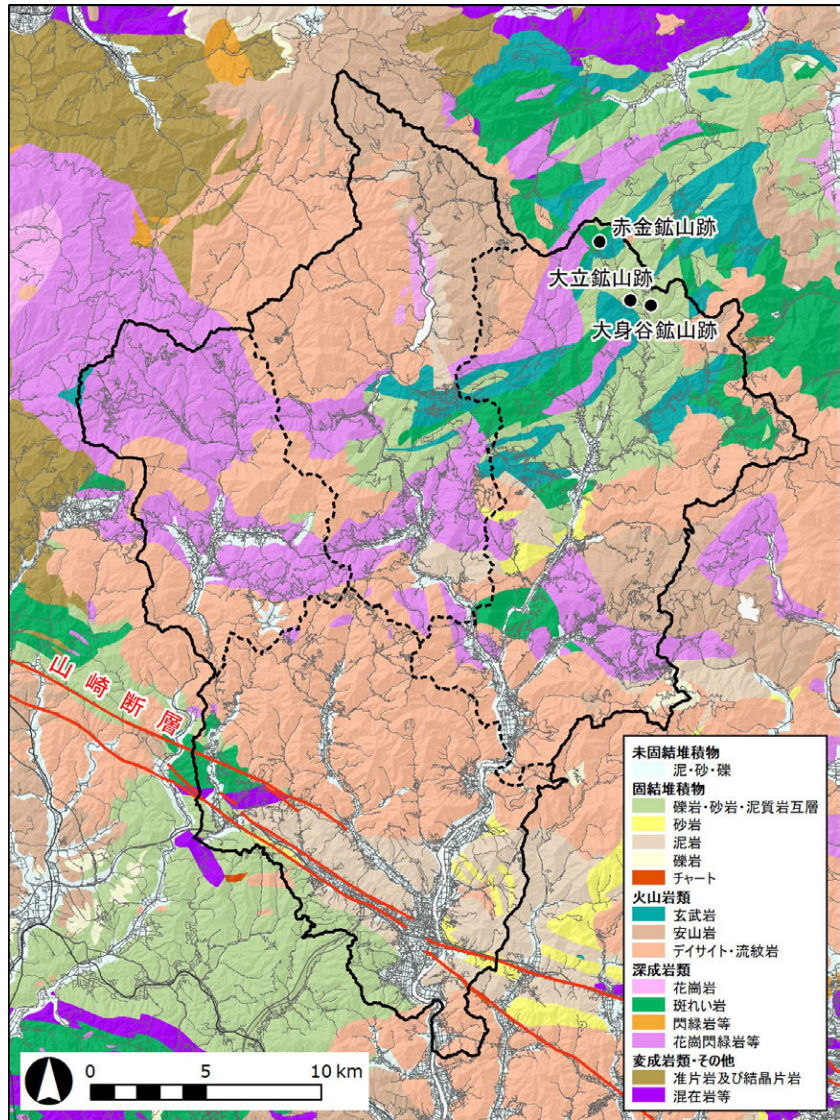
1つは舞鶴層群で、古生代末から中生代初期にかけて海域で形成された礫岩、砂岩、泥質岩等の固結堆積物や海底火山活動による玄武岩等から成ります。この層群には斑れい岩、閃緑岩、花崗岩、花崗閃緑岩等の夜久野複合岩類が貫入しており、上岸田層や千町層等の地層も局所的に見られます。

もう1つは、中生代末から新生代初期にかけて、陸上の火山活動に伴い形成された層です。この層はさらに流紋岩、安山岩等と泥岩、砂岩等が重なる生野層群と、地下のマグマ活動による花崗岩類に分けられます。その他、市最北端の氷ノ山一帯は鉢伏山火山岩と総称する新第三紀に噴出した安山岩等の火山岩類で覆われており、河川沿いには未固結堆積物の沖積層及び段丘礫層が分布します。

地下資源は、市北部に金属鉱床が分布しており、一宮町繁盛地区倉床の赤金鉱山、大立鉱山、大身谷鉱山ではかつて金、銀、銅、亜鉛等を産出していましたが、現在は全ての鉱山が閉山となっています。

地質時代	地質系統		現在までの年数
	堆積岩	火成岩	
新生代	沖積層 段丘礫層	火山岩 深成岩	170万年
		六甲変動	
	鉢伏山火山岩	2,300万年	
山崎断層			
古第三紀	生野層群	花崗岩類	6,500万年
中生代	白亜紀	ジュラ紀変動	1億4,300万年 2億1,200万年
	ジュラ紀		
	三畳紀		
古生代	千町層(一宮) 上岸田層(一宮)	夜久野複合岩類	2億4,700万年
			2億8,900万年
	舞鶴層群	3億6,700万年	
	石炭紀	4億1,600万年	
	デボン紀	4億4,600万年	
	シルル紀	5億700万年	
	オルドビス紀	5億7,900万年	
カンブリア紀			

図1-3 宍粟市の地質系統表  
(出典:『宍粟のあゆみ』に加筆して作成)



※宍粟市及び周辺に分布する主な地質を記載しています。

図1-4 地質

(出典:20万分の1シームレス地質図、活断層データベース(国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター)を元に作成)

### 3) 山崎断層帯

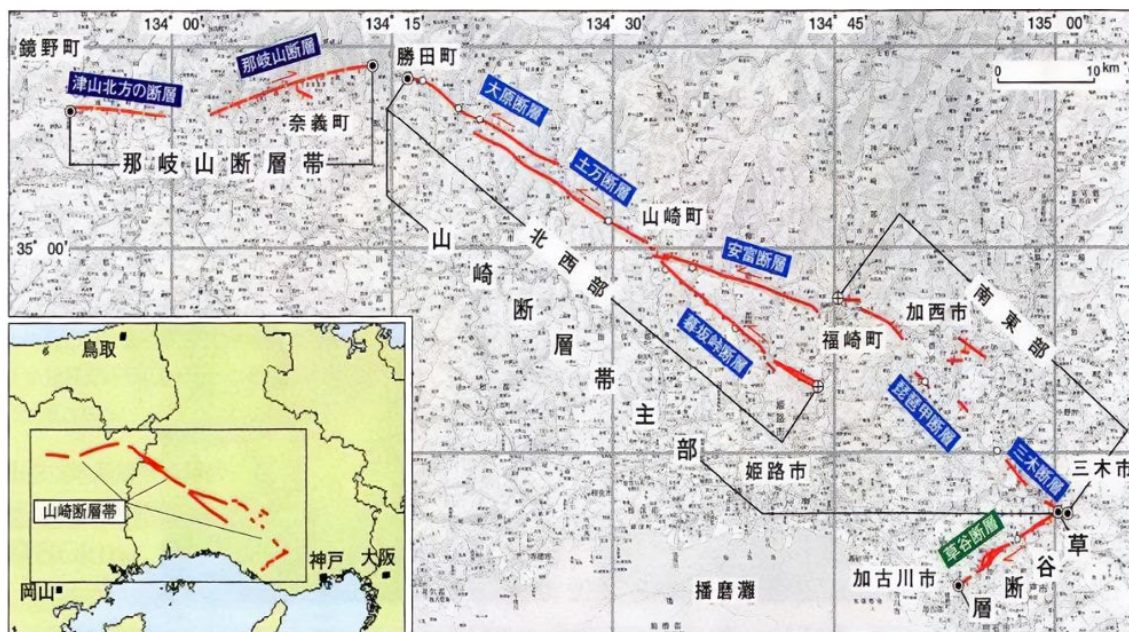
山崎断層帯は、岡山県東部から兵庫県南東部にかけて分布する総延長約 100km の断層帯です。断層帯は大きく那岐山断層帯、山崎断層帯主部、草谷断層の3つに区分されます。本市南部を横断する山崎断層帯主部は、岡山県美作市から兵庫県三木市に至る、全体の長さ約 79km の断層帯です。山崎断層帯主部はさらに、大原断層、土万断層、安富断層及び暮坂峠断層までの北西部と、琵琶甲断層及び三木断層の南東部に区分され、ほぼ西北西-東南東方向に一連の断層が連なるように分布します。

山崎断層帯が活断層であることは、1960年代の終わりに発見され、中国縦貫自動車道工事に伴い明らかとなりました。平安時代に記録が残る播磨国地震（貞観10年（868））の震源であった可能性が高く、大地震のたびにずれ動いた活断層は、「破碎帯」とよばれる軟弱な岩盤を活断層にそって帯状に発達させ、直線的に続く起伏の小さな地形を作りました。中国縦貫自動車道の福崎ICから佐用ICまでの間にほとんどトンネルがないのは、この山崎断層帯に沿って建設されたものだからです。

これまでの調査研究において、山崎断層帯は数十万年前から大地震を繰り返してきた活断層であることが明らかとなりました。将来の地震発生が懸念される一方で、断層活動が本市の特異な地形、景観を生み出してきました。山崎町今宿地区では、揖保川を横切る断層の横ずれ運動により盛り上がった岩塊が堰を作り、「十二波」と呼ばれる景勝地を形成しています。



十二波(山崎町今宿)  
(出典:『実粟のあゆみ』)



【図の説明】

山崎断層帯の活断層位置。左下の概略地図の中の長方形は詳細図の範囲を示す。

●は断層帯の両端、⊕は北西部と南東部の境界(基図は国土地理院発行の20万分の1の数値地図「京都及大阪」「姫路」「高梁」を使用)

図1-5 山崎断層帯を構成する活断層の名称と断層帯の区分

(出典:岡田篤正(2016):1:25,000 都市圏活断層図那岐山断層帯(山崎断層帯)とその周辺「津山東部」解説書。国土地理院技術資料 D1-No. 754, 1-21p.)

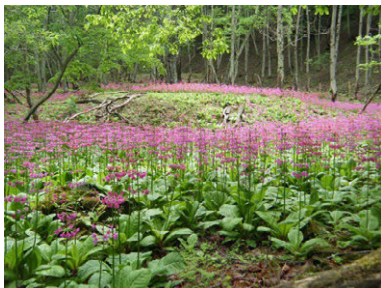
### (3) 植生・生態系

市域の大部分を占める山林は、その多くが二次林であるコナラ群落や人工林であるスギ・ヒノキ植林で、標高 600m 以上のブナクラス域にイヌブナ群落やチシマザサ・ブナ群団等の落葉広葉樹林が分布します。市北部には針葉樹林や広葉樹林の混交林、ブナ林、イヌブナ林等の貴重な植生が分布し、豊かな森林が形成され、自然公園となっています。ちくさ高原には、兵庫県の絶滅危惧種に指定されているクリンソウの日本有数の群生地があります。

自然公園地域外にも、社寺や集落に巨樹・巨木林が数多く残存し、市内の河川や水路には特別天然記念物であるオオサンショウウオが生息するなど、市内の至る所で身近に自然に触れることができる環境が保たれています。

兵庫県版レッドリストにおける掲載データを参考とした本市における動植物の生息・生育状況は、生息が確認されている絶滅のおそれのある動物が 229 種、生育が確認されている絶滅のおそれのある植物が 228 種となっています。(令和 3 (2021) 年度時点)

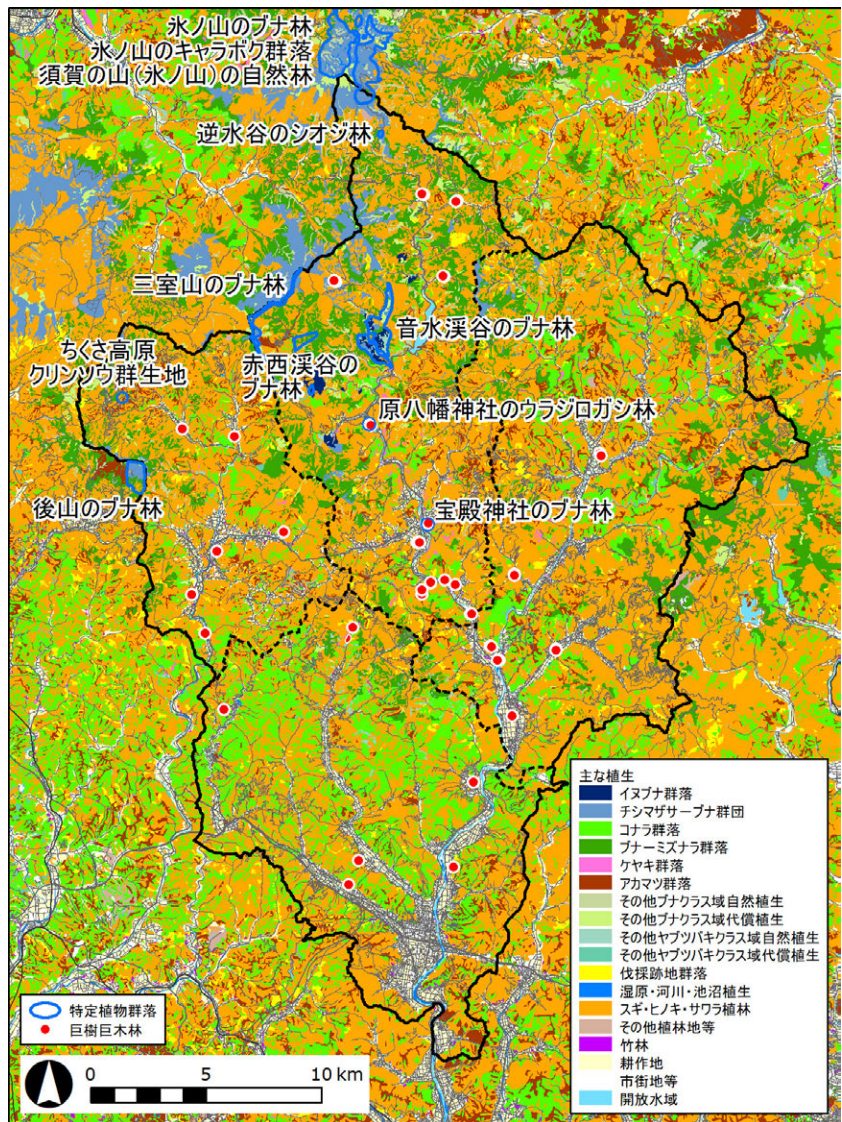
豊かな自然を有する反面、シカやイノシシ等の野生動物による農作物や植栽苗木の被害等が発生しています。



ちくさ高原のクリンソウ群生地  
(出典: (公財)しそ森林王国観光協会)



オオサンショウウオ



※宍粟市及び周辺に分布する主な植生を記載しています。

図1-6 植生及び特定植物群落、巨樹巨木林  
(出典: 自然環境保全基礎調査(環境省自然環境局生物多様性センター)  
[植生調査][特定植物群落調査][巨樹巨木林調査]を元に作成)

#### (4) 気象

本市は日本海と瀬戸内海の間の中の内陸部にあり、市域の北部と南部で気候の様相が異なります。

市北部は、日本海型気候の影響を受け、山間部特有の寒冷多雨の気候です。冬季は雪が多く、積雪量 100cm を超えるところもあり、波賀町及び千種町の範囲は、豪雪地帯対策特別措置法による豪雪地帯に指定されています。

市南部は瀬戸内海側に位置し、瀬戸内海型気候の影響を受けることから、温暖な気候です。

市内の一宮観測所の過去 30 年間の気象データの平年値をみると、最高気温は 8 月の 25.8℃、最低気温は 1 月の 2.4℃ となり、年間平均気温は 13.8℃ です。年間降水量（平年値）は 1,961.8mm となり、月別では 7 月(283.0 mm)の降水が最も多くなります。一方、市北部の最寄りの若桜観測所（鳥取県若桜町）の過去 30 年間の気象データをみると、月別降水量は 9 月(239.1mm)に最も多くなります。

雨の降り方によって、最大雨量が 6、7 月に集中する「梅雨型」の山崎町及び一宮町、最大雨量が 9、10 月に集中する「台風型」の波賀町及び千種町と区分することができます。

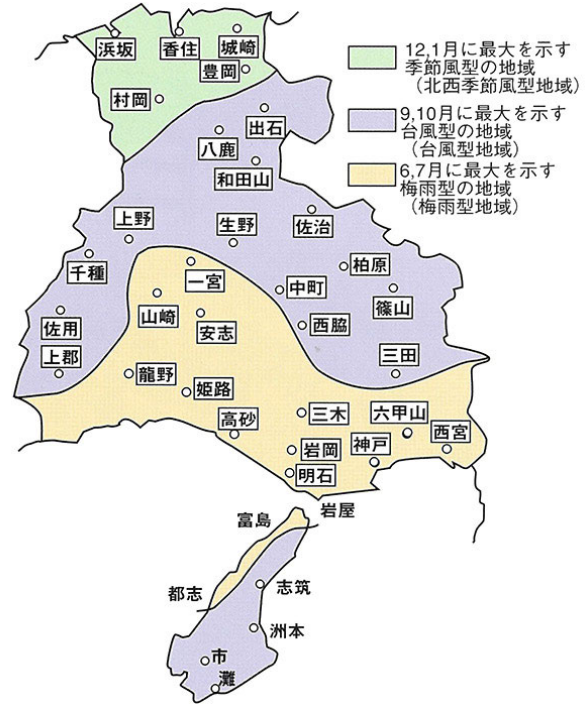
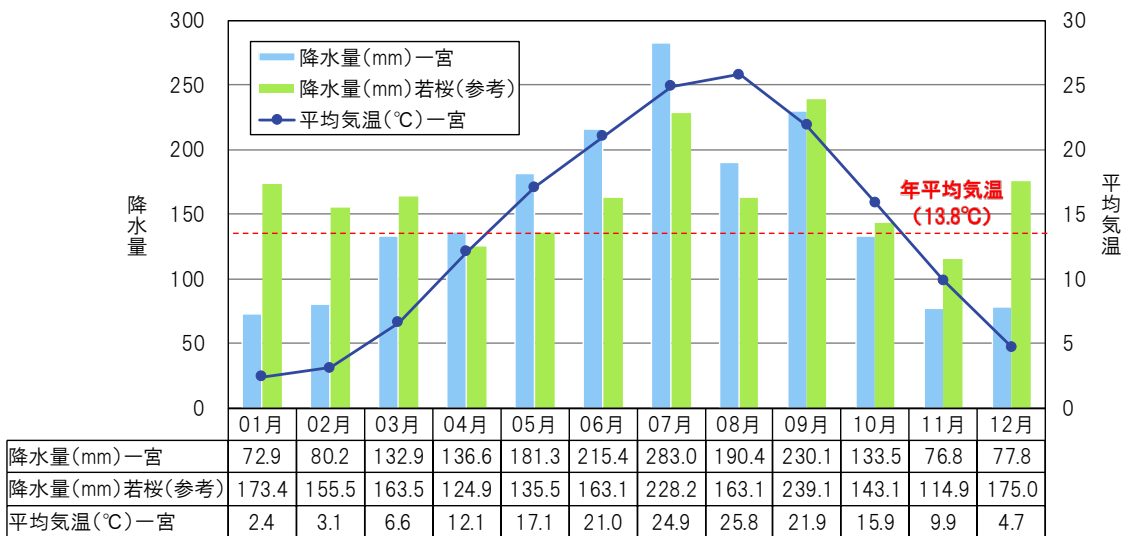


図1-7 兵庫県の月降水量が最大を示す月の分布  
(出典:『実粟のあゆみ』)



※平成 3 年（1991）～令和 2 年（2020）の平年値

※観測地点：一宮観測所（実粟市）及び若桜観測所（鳥取県若桜町）

図1-8 平均気温及び降水量(30年間の平年値)

(出典:過去の気象データ検索(気象庁)を元に作成)

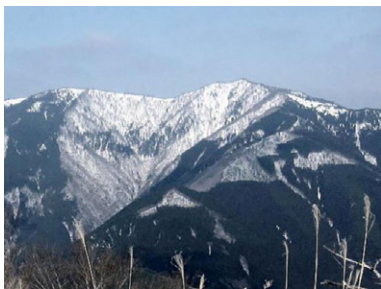
## (5) 自然公園・国有林

### 1) 自然公園

本市の自然環境の最大の特徴は、豊かな森林資源と揖保川、千種川の清流であり、それらをめぐる地形や景観、多種多様な動物、植物群の魅力にあふれた市内3箇所の自然公園（国定公園1箇所、県立自然公園2箇所）が指定されています。

氷ノ山後山那岐山国定公園及び音水ちくさ県立自然公園は、市北部の波賀町及び千種町に位置し、氷ノ山、後山に代表される1,000m級が連なる山岳景観と、引原川及び千種川を中心とした原不動滝等の大小多くの滝、音水湖及び音水溪谷、赤西溪谷等の河川、溪谷景観が広がります。周辺一帯の山岳は、兵庫県下でも最も自然の豊かな地域の1つであり、野生動物にとって良好な河川環境や森林環境が残されています。

雪彦峰山県立自然公園は、市東部の一宮町に位置し、千町ヶ峰や雪彦山（兵庫県姫路市）等に代表される山岳景観、峰山・砥峰高原（兵庫県神崎郡神河町）の高原景観、福知溪谷に代表される溪谷景観が広がります。福知溪谷は、砥峰に源を発する清流と森林がおりなす四季折々の溪流美を見せてくれます。



後山(千種町河呂)



音水湖(波賀町引原)



福知溪谷(一宮町福知)

(出典：(公財)しろう森林王国観光協会)

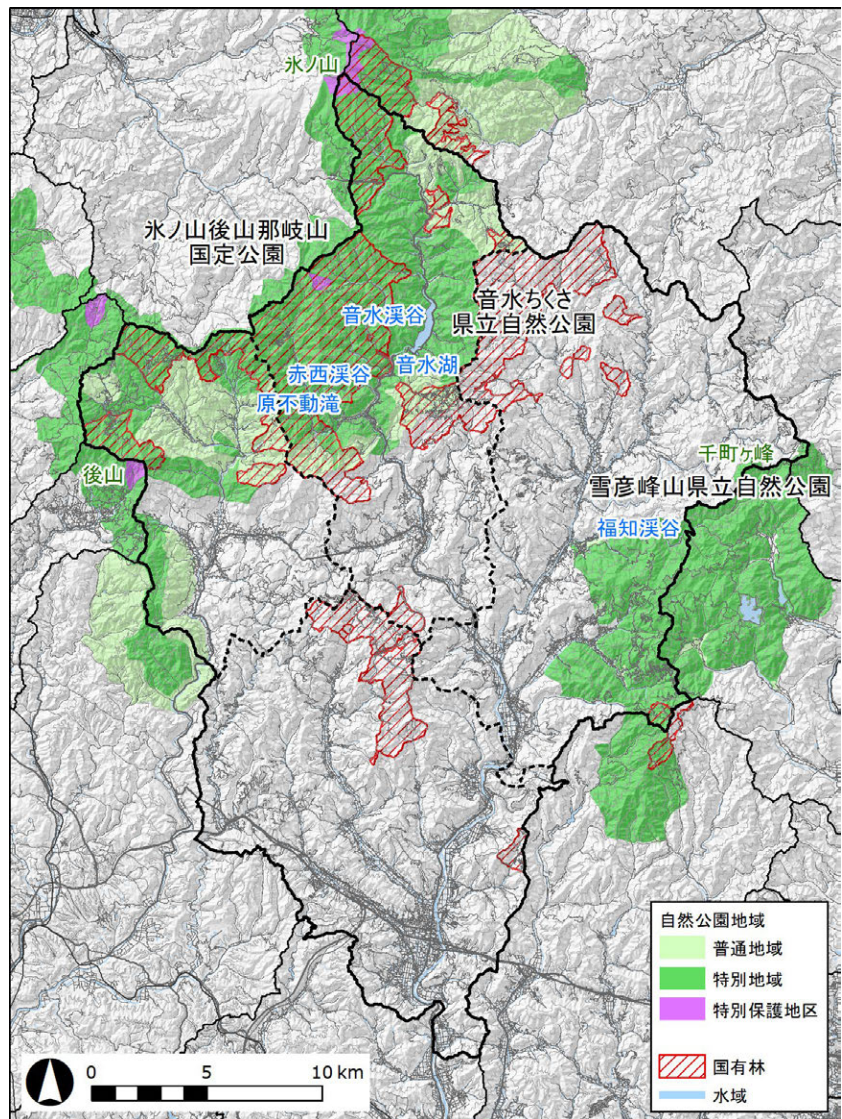


図1-9 自然公園・国有林

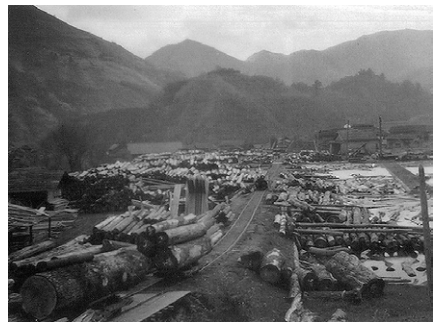
(出典：国土数値情報(国土交通省)[自然公園地域][森林地域][水域]を元に作成)

## 2) 国有林

本市は、兵庫県有数の森林面積を有しており、特に赤西国有林をはじめとした22の国有林（面積12,861ha）は、兵庫県内の全ての国有林（30,298ha）の4割強を占めています。

国有林は、明治2年（1869）及び3年（1870）に幕府や各藩等が所有していた「御林（官林）」と、神社や寺院が所有していた「社寺有林」を国が管理したことにより、「官林」として誕生しました。山林地域への労働の場の提供、水源を守り山崩れを防ぐといった公益的な活用や人々が入りにくい奥山の管理といった目的もありましたが、最も大きな理由は、戦時下に国が財源を確保するための「財源の山」として管理しようとしたものでした。

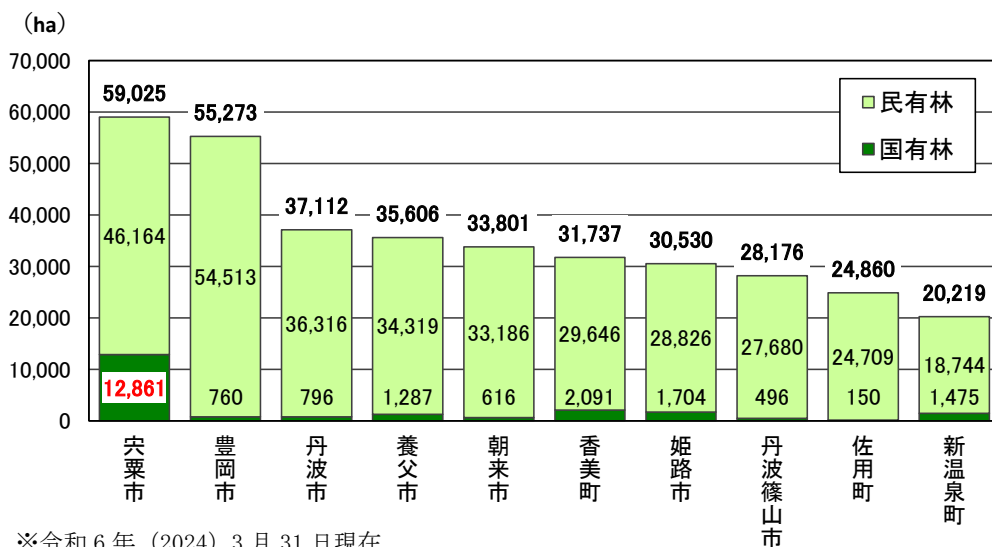
本市では、明治19年（1886）に兵庫大林区署山崎派出所が山崎町今宿に設置され、宍粟郡及び揖西、揖東、赤穂、佐用の各郡の官林を管理しました。当時、市内に大きな貯木場をかかえ、特に上野貯木場（波賀町有賀）には国有林等で伐採された木材が森林鉄道により運び込まれました。赤西国有林や音水国有林の天然スギは「宍粟スギ」と呼ばれ、全国的に有名でした。



上野貯木場(昭和20年代)  
(波賀町有賀)

(出典:『追憶ふるさと宍粟写真集』)

大正13年（1924）に営林局署制度が実施されるとともに、大阪営林局山崎営林署と名称が変更され、平成11年（1999）には近畿中国森林管理局兵庫森林管理署として現在に至ります。



※令和6年（2024）3月31日現在

※国有林は、国有林、官行造林、その他省庁林を含みます。

図1-10 民有林及び国有林面積 兵庫県の上位10市町

(出典:『令和5年度兵庫県林業統計書』を元に作成)

## 2. 社会的環境

### (1) 宍粟市の沿革

宍粟という地名は、『播磨国風土記』に「宍禾郡」として記された歴史ある名です。

明治22年(1889)の町村制施行に伴い宍粟郡は1町18村となり、戦後の市町村合併により昭和30年(1955)に山崎町、翌年に一宮町、波賀町、安富町が誕生しました。昭和32年(1957)には三河村が佐用郡南光町に編入され、昭和35年(1960)の町制施行により千種村が千種町となると、以降は宍粟郡5町が広域的に連携しながら地域振興に取り組んできました。

平成17年(2005)4月1日に、山崎町、一宮町、波賀町、千種町の4町が合併して宍粟市となり、翌年に安富町は姫路市に編入され、現在に至ります。

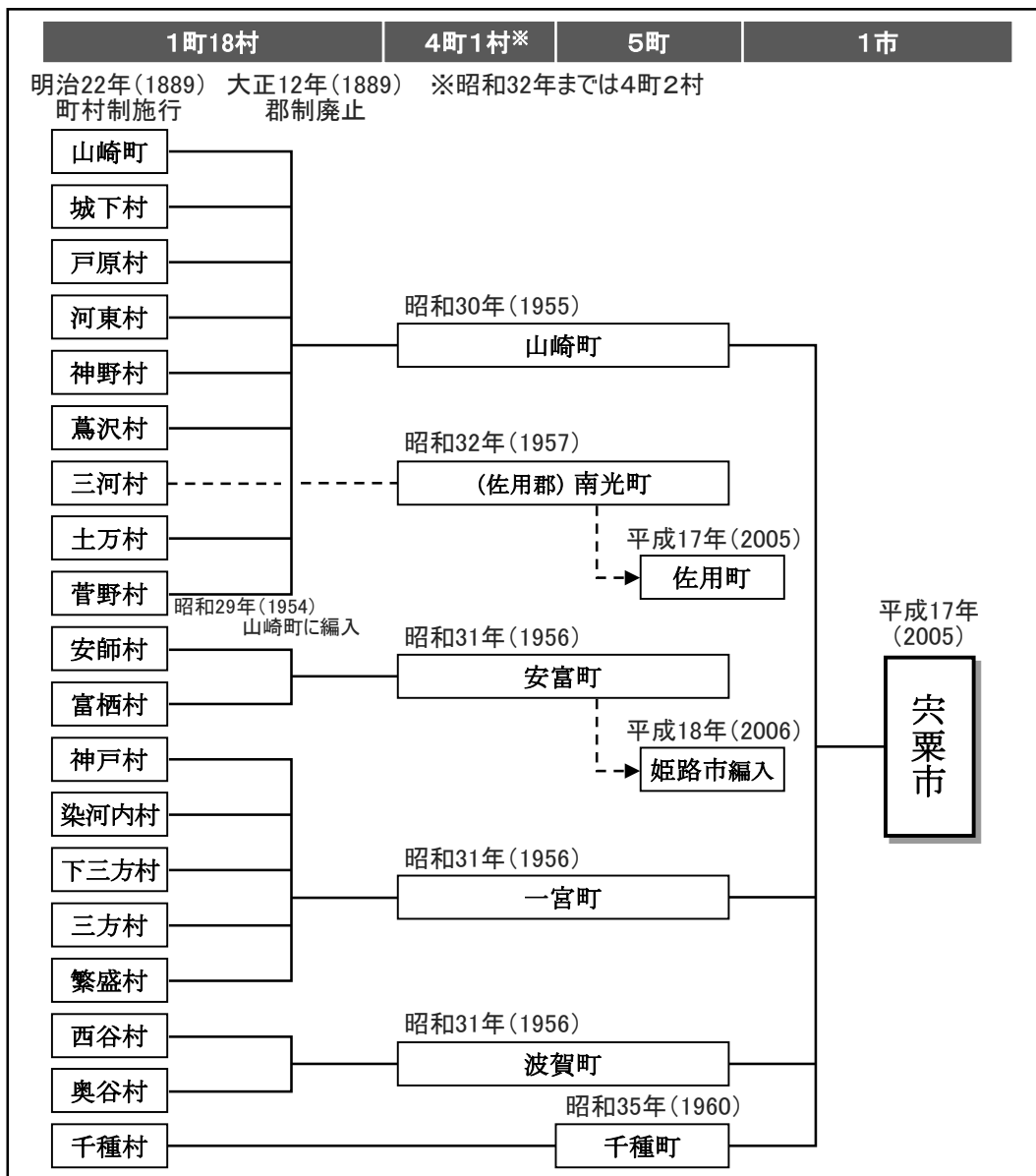


図1-11 宍粟市の沿革  
(出典:『宍粟のあゆみ』に加筆して作成)

## (2) 人口・世帯

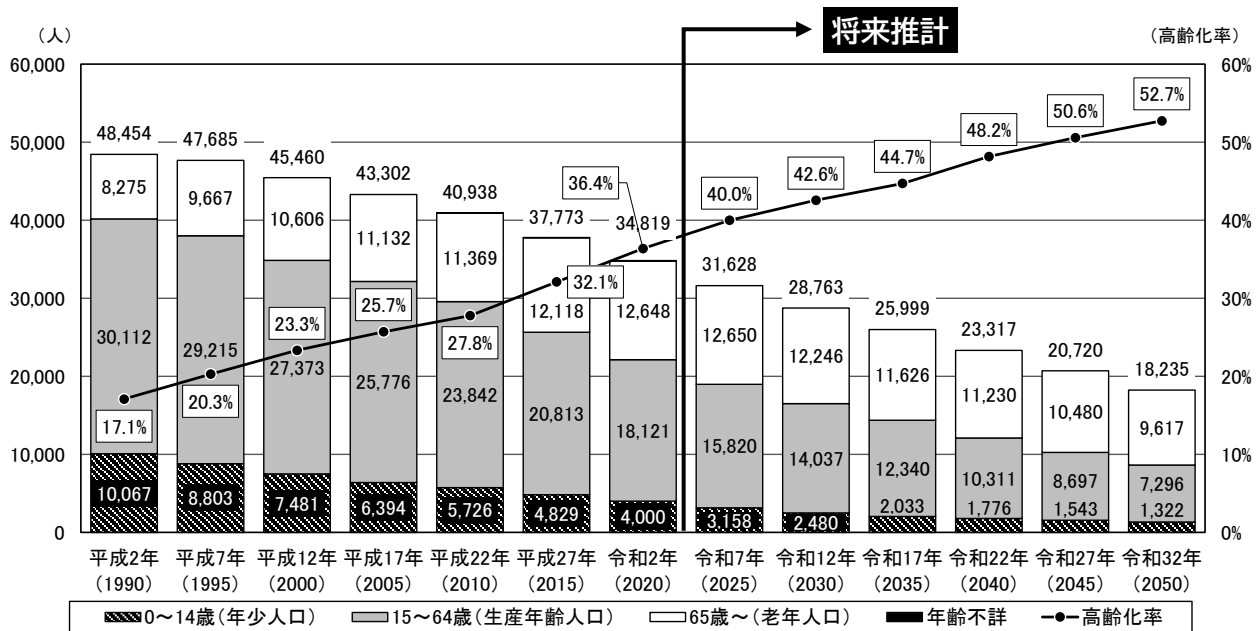
### 1) 人口

本市の人口は、令和7年(2025)8月末現在33,183人となり、近年は一貫して減少傾向にあります。

国勢調査における年齢区分別人口をみると、令和2年(2020)時点で生産年齢人口(15~64歳)が約5割を占め、年少人口(15歳未満)は1割程度となります。一方で老年人口(65歳以上)は約4割(36.4%)となり、これは兵庫県平均(29.3%)を大きく上回ります。

地域別では、山崎町を除く3町の人口減少が顕著であり、また高齢化率(老年人口割合)も市北部の波賀町及び千種町で現在4割を超えています。

人口は今後も減少傾向が続き、約25年後(令和32年(2050))には18,235人と令和2年(2020)人口の約6割にまで落ち込み、高齢化率は5割を超えると予測されます。



※年齢不詳は平成22年(2010)1人、平成27年(2015)13人、令和2年(2020)50人。

※高齢化率は年齢不詳を除いて算出しています。

図1-12 人口の推移

(出典:国勢調査、日本の地域別将来推計人口(令和5年(2023)推計)(国立社会保障・人口問題研究所)を元に作成)

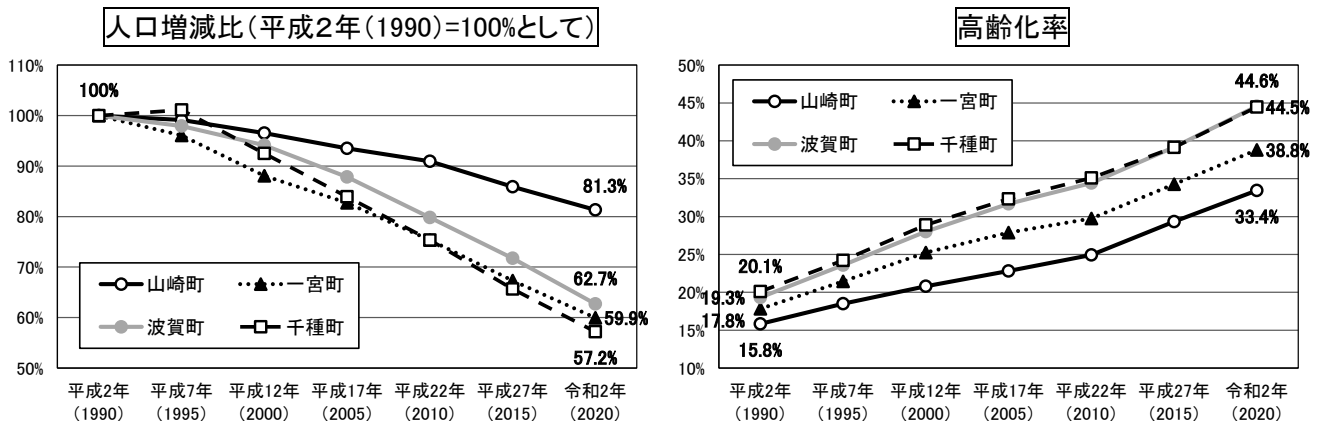


図1-13 地域別 人口増減比及び高齢化率の推移

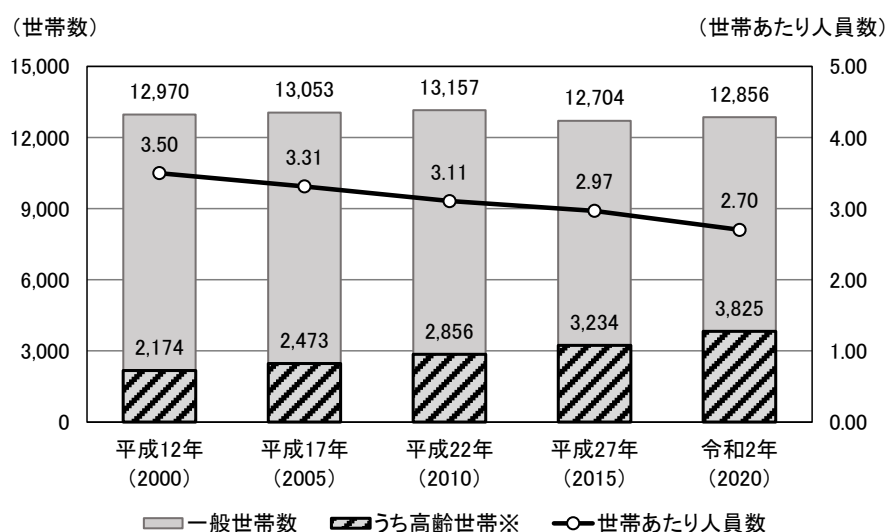
(出典:国勢調査を元に作成)

## 2) 世帯

世帯数は、令和2年(2020)国勢調査時点で12,856世帯(一般世帯数)となり、近年13,000世帯前後と概ね横ばいで推移しています。

世帯あたり人員数は一貫して減少傾向にあり、平成12年(2000)時点で3.50人/世帯が令和2年(2020)には2.70人/世帯にまで減少しており、核家族化が進行しています。

高齢世帯(高齢夫婦のみの世帯や高齢単身世帯)の増加が顕著であり、平成12年(2000)の2,174世帯が令和2年(2020)時点では3,825世帯と1.8倍近くまで増加しています。



※高齢世帯：65歳以上の高齢者単身世帯及び65歳以上の高齢者を世帯主とする夫婦のみの世帯

図1-14 世帯数等の推移

(出典：国勢調査を元に作成)

### (3) 交通

#### 1) 道路網

市内を通過する主要道路網は、市域を南北に貫く国道 29 号、東西に横断する国道 429 号を基軸として、主要地方道及び一般県道が市内に張り巡らされています。

市外及び県外へのアクセス拠点となる中国縦貫自動車道山崎インターチェンジ（山崎 I C）が市南部で国道 29 号と接続します。

#### 2) 公共交通

市内には鉄道がなく、バスによる公共交通網が整備されています。平成 27 年(2015)、交通空白地の解消や財政負担の改善といった観点から地域公共交通の大幅な再編を行い、市内を運行するバスを全て民間事業者が運行する路線バスに変更するとともに、旧町域間を結ぶ大型バス、集落から大型バスへ接続する小型バス、ショッピングセンターや医療モール等を巡る循環バスといった住民の利用形態にあわせたバス運行が行われています。令和 7 年(2025) 8 月現在、大型バス 4 路線、小型バス 15 路線、循環バス 1 路線が運行されています。

また、市内と市外を結ぶ路線バスは、姫路方面とたつの方面間で運行する広域バスと、神戸三宮方面及び津山、大阪方面に向かう高速バスがあります。

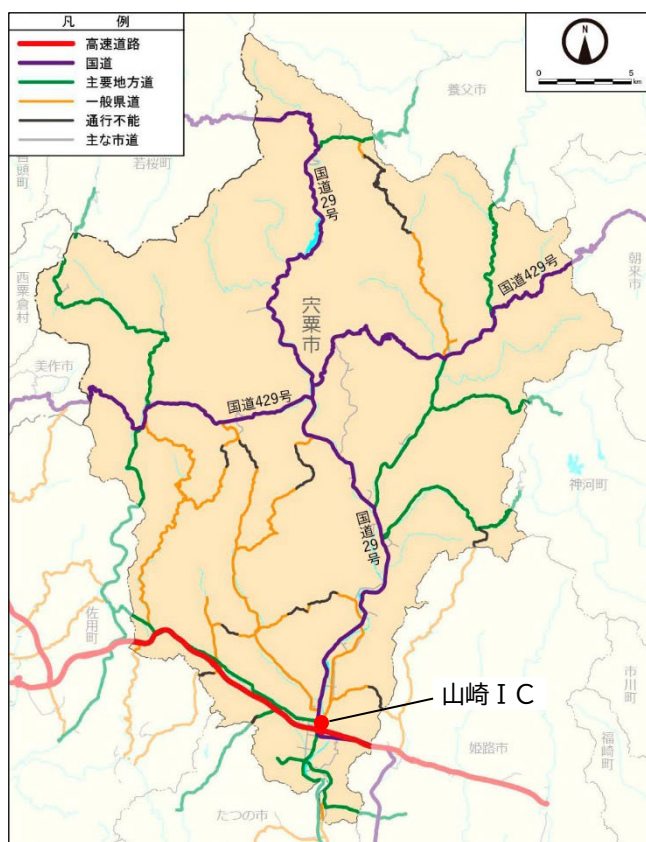


図1-15 主要道路ネットワーク  
(出典:『宍粟市地域公共交通計画』に加筆して作成)

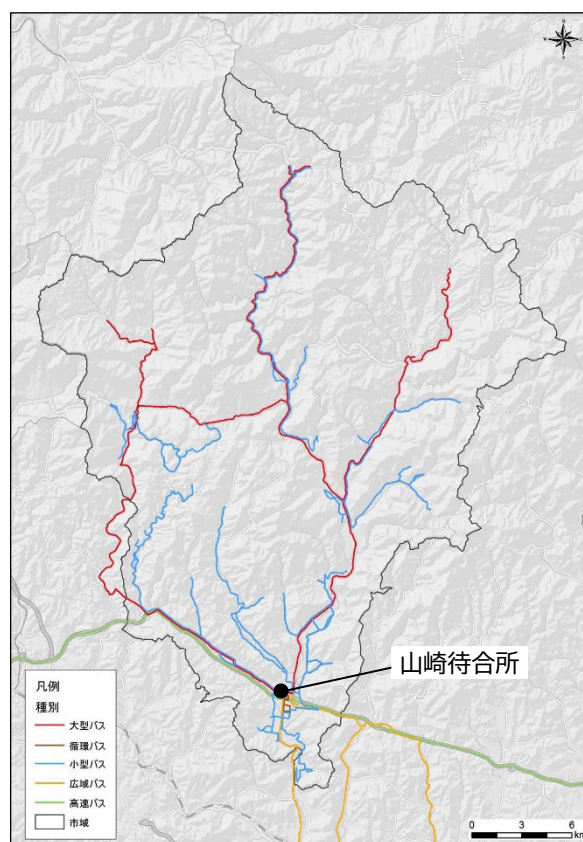


図1-16 路線バスネットワーク  
(出典:『宍粟市地域公共交通計画』に加筆して作成)

#### (4) 土地利用

総面積 658.54km<sup>2</sup>のうち、森林が9割(89.6%)を占めており、林業以外に、森林セラピーや宍粟50名山等の観光にも活用されています。

森林以外では、農地(3.9%)が揖保川及び千種川流域に沿って広がり、上流域の一部には谷田や棚田が形成されています。

都市的土地利用として、宅地(1.4%)が山崎町中心部の市街地等に集積しており、その他国道や主要地方道の幹線道路沿いに集落地等が分布します。

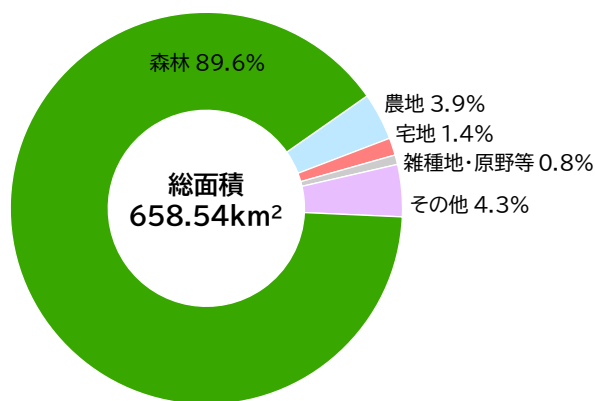


図1-17 土地利用割合(令和6年(2024))  
(出典:兵庫県市区町別主要統計指標、  
『宍粟市森林整備計画』を元に作成)

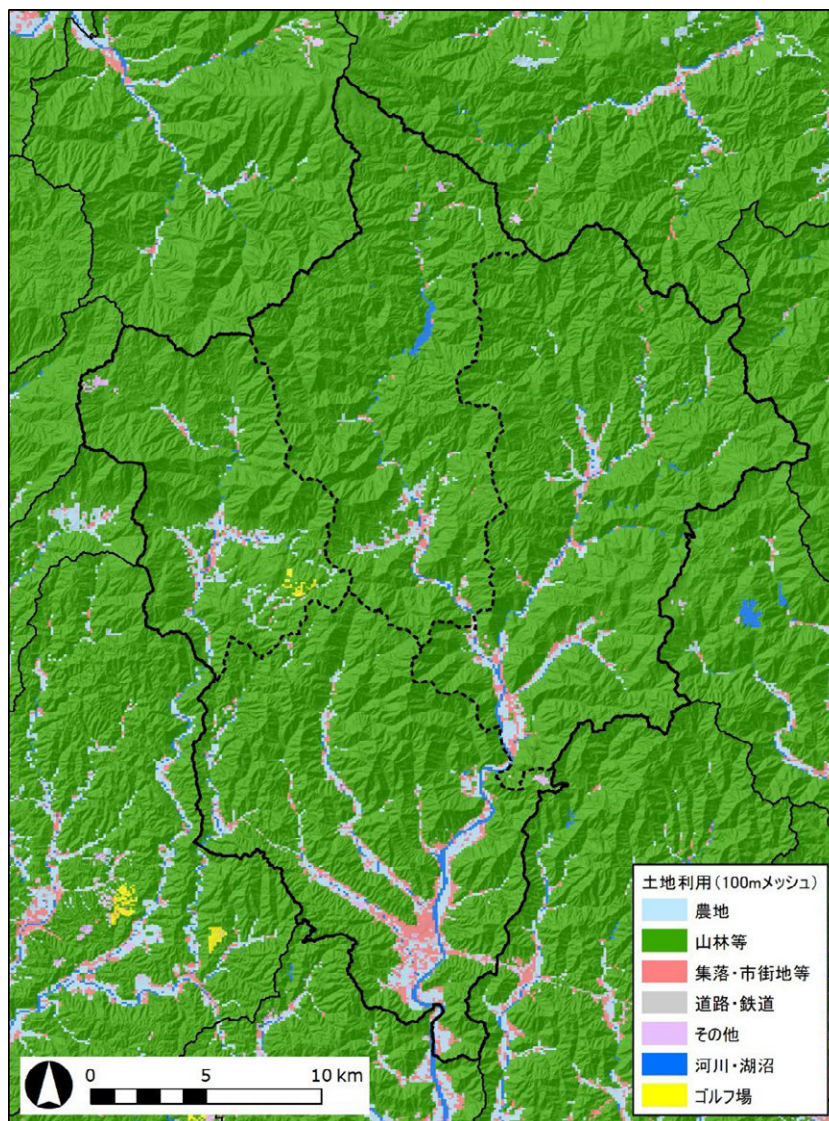


図1-18 土地利用

(出典:国土数値情報(国土交通省)[土地利用細分メッシュ]を元に作成)

## (5) 景観

「宍粟市風景ビジョン」(令和4年(2022)10月策定)では、先人から脈々と受け継がれてきた豊かで美しい自然、歴史や人の営みが育んだ本市の魅力ある風景を次のように整理しています。

### ① 都市/まちと暮らし

市内の各地域の中心に生活圏の拠点があり、住宅地には生活に必要な機能が集積し、まちの風景が形成されています。山崎町では、町南部に都市機能が集積し、都市的な風景が形成されています。他市町や地域をつなぐ道路沿いは飲食店等が立地し、賑わいのある風景の形成につながっています。



町家再生・商店街の風景

### ② 農地/里地と暮らし

揖保川、千種川等の水資源が豊富で、南北に長く標高差のある土地柄もあって、季節や地域により多様な農産物が生産され、田園や所によって棚田の風景も形成されています。田植えや収穫の様子や生き物の声、農産物の匂いや味といった五感で四季を感じることができる代表的な風景です。



農業体験の風景

### ③ 山林/里山と暮らし

1,000m級の山々や原生林、溪谷美等の貴重な自然の風景が広がります。観光名所周辺では広葉樹の植栽が進み、桜や紅葉が彩る里山風景が形成されています。森林管理は防災や環境面から重要であるだけでなく、キャンプや登山、森林セラピーといった多様なレジャー活動が行われています。



森林整備の風景

### ④ 河川/湖と暮らし

中国山地に連なる山々を源流とする揖保川と千種川は、森林や生き物を育み、美しい河川の風景を形成して、市民や来訪者に親しみと安らぎの水辺風景を提供します。音水湖はカヌーをはじめとしたアクティビティのスポットであり、周辺の桜や紅葉の彩りが個性豊かな湖の風景を形成しています。



音水湖カップ  
カヌーポロ大会の風景

### ⑤ 歴史/文化と暮らし

城下町の名残や歴史ある社寺、家原遺跡公園や森林鉄道遺構など、人々の生業や生活に育まれた、地域の風土をあらわす歴史文化的な風景が残されています。また、チャンチャコ踊りや獅子舞、伝統的な祭り等の民俗芸能や伝統行事が、文化を感じられる風景として継承されています。



チャンチャコ踊りの風景

(出典:『宍粟市風景ビジョン』)

## (6) 産業

本市の産業構造について、市内総生産（名目）は年間1,100億円前後で推移しており、西播磨地域全体の1割程度を占めています。

産業分類（大分類）別にみると、令和4（2022）年度で7割を第3次産業が占めています。残りの3割弱が第2次産業、第1次産業は1.7%となります。

西播磨地域全体の産業分類の構成割合と比較すると、本市は第2次産業の割合が低く、第3次産業の割合が高くなっています。

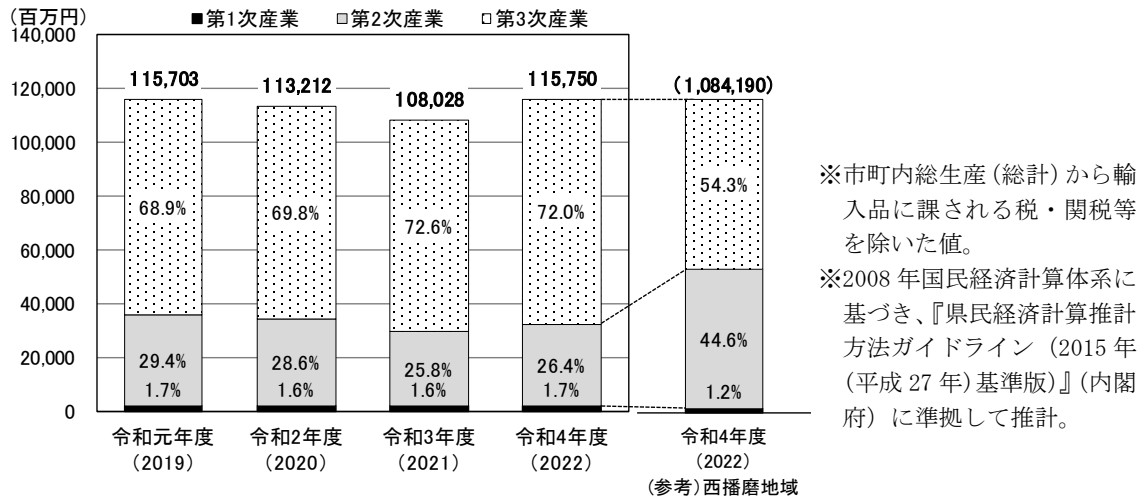
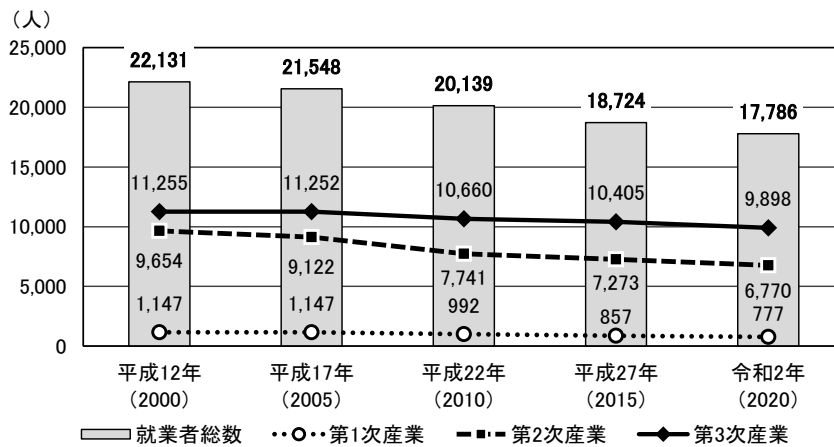


図1-19 産業分類(大分類)別市内総生産(名目)の推移  
(出典:『令和4年度兵庫県市町民経済計算』を元に作成)

就業人口総数は一貫して減少傾向にあり、令和2年（2020）で17,786人となります。産業分類（大分類）別では、第3次産業就業者が最も多く、次いで第2次産業、第1次産業となります。この傾向の推移は変わりませんが、近年、第2次産業の減少幅が比較的大きくなっています。

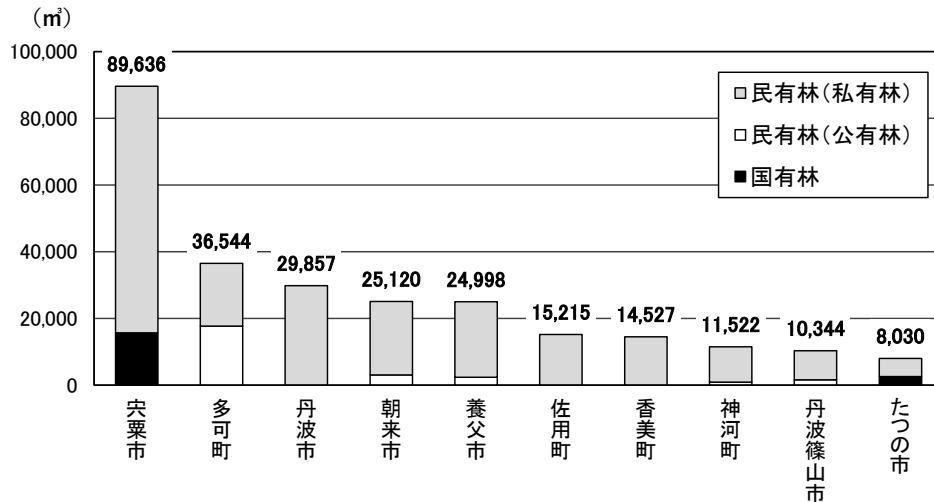


※就業人口総数は分類不能の産業を含むため、第1～3次産業就業人口数の合計とは一致しません。

図1-20 産業分類(大分類)別就業人口の推移  
(出典:国勢調査を元に作成)

森林資源が豊富な本市では、林業が重要な産業となっています。

木材の素材生産量は令和5年（2023）で年間約9万m<sup>3</sup>に達しており、これは兵庫県全体の約3割を占め、他市町と比べて突出した生産量です。また、他の市町では民有林（私有林、公有林）からの木材供給が大半であるのに対して、本市では国有林からも一定の供給が行われていることも特徴です。



※令和5年（2023）1月～同12月の生産量

図1-21 年間素材生産量(材料用途)兵庫県の上位10市町

(出典:『令和5年度兵庫県林業統計書』を元に作成)

一方、林業生産活動の主体である林業経営体は、近年、急速に減少傾向にあります。農林業センサス（農林業経営体調査）において、平成17年（2005）時点で725経営体を数えた本市の林業経営体数は、15年後の令和2年（2020）には84経営体と10分の1近くまで減少しており、事業の採算性の悪化や担い手の高齢化等による人手不足が顕在化しています。

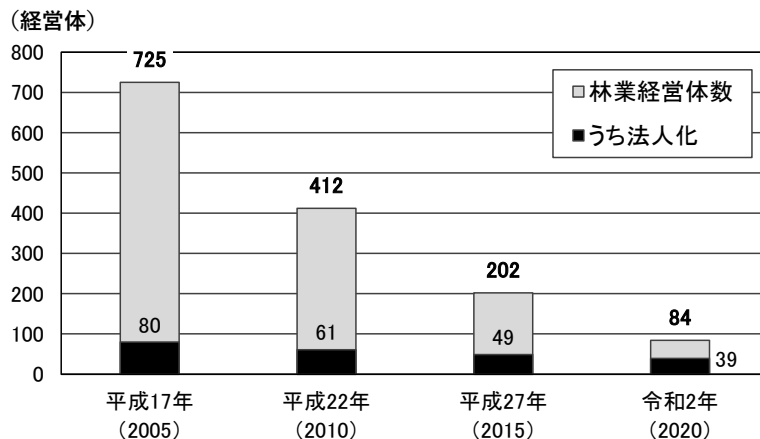


図1-22 林業経営体数の推移

(出典:農林業センサス(農林業経営体調査)を元に作成)

## (7) 観光

本市では、活力ある地域づくり、交流人口の拡大、地域経済の持続的な発展及び市民生活の向上に資することを目的に「ふるさと宍粟観光条例」を制定し、本市特有の地域資源を活かした観光振興に取り組んでいます。登山、カヌー、スキーや紅葉、藤等の自然を活用したコンテンツが人気で、キャンプや登山といったアウトドアツーリズムやグリーンツーリズム等の集客力が高く、また、森林を活かした健康や癒やしをテーマとした森林セラピーの他、地域おこし協力隊による観光振興の取組など、新たな観光まちづくり活動も活発化しています。

本市の観光入込客数は、コロナ禍以前の令和元(2019)年度に100万人近くに達していません。日帰り客が大多数を占めており、訪日外国人旅行者は非常に少ないという状況でした。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、全国的な傾向と同様に、令和2(2020)年度は約70万人(令和元年度比約25%減)まで観光客は大きく落ち込みました。令和3(2021)年度以降は、コロナ禍後の観光需要の回復傾向がみられ年間80万人強(令和元年度比約14%減)で推移していますが、需要の完全な回復には至っていません。

観光の目的別では、「その他(道の駅等)」が約36%と最も多く、次いで「温泉・健康」(約28%)「スポーツ・レクリエーション」(約18%)となります。「歴史・文化」を目的とした観光は1割未満(2.8%)にとどまります。

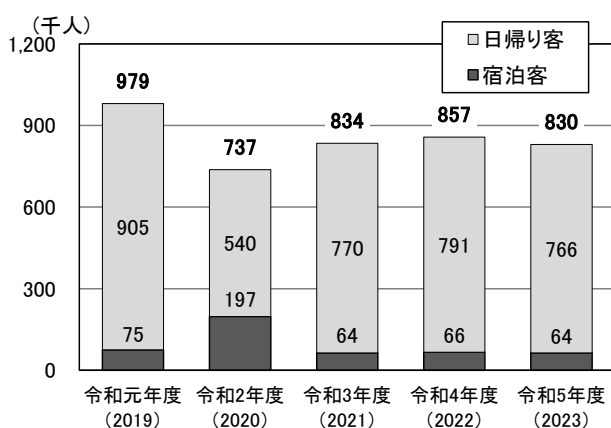


図1-23 観光入込客数推移  
(出典:『兵庫県観光客動態調査報告書』  
(各年度)を元に作成)

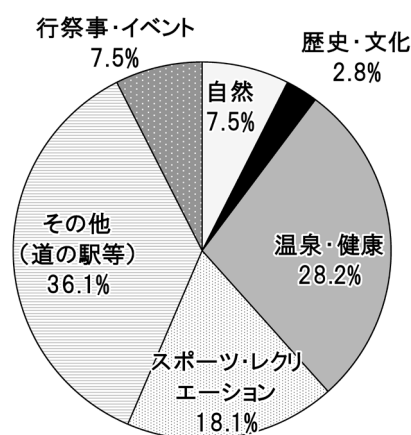


図1-24 観光目的別割合(令和5(2023)年度)  
(出典:『令和5年度兵庫県観光客動態調査報告書』  
を元に作成)

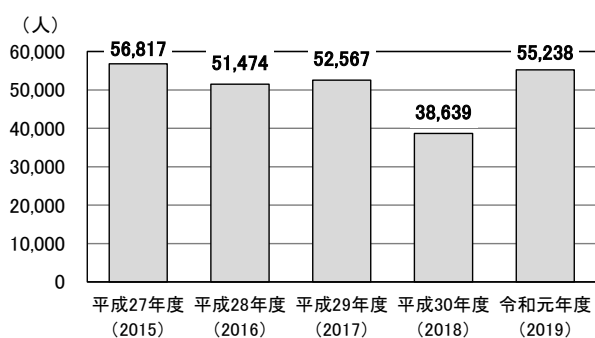


図1-25 グリーンツーリズム等利用者数\*の推移  
(出典:『宍粟市環境基本計画』を元に作成)



音水湖カヌー

森林セラピー

(出典:『宍粟市環境基本計画』)

\*グリーンツーリズム：以下のプログラム等参加者の合計  
国見の森公園プログラム、音水湖カヌー、氷ノ山ツーリズム登山、森林セラピー体験

## (8) 文化財関連施設

市内には、山崎歴史郷土館及び宍粟市歴史資料館等の資料館の他、遺跡公園や波賀歴史伝承の家など、多様な文化財関連施設が所在します。山崎歴史民俗資料館は県登録有形文化財として保存を図るとともに、不定期の公開を行っています。

その他、図書館や生涯学習のための社会教育施設、道の駅等の観光振興施設においても、地域の歴史や文化財に関わる情報発信等に取り組んでいます。

表1-1 主な文化財関連施設

区分	地域	施設名称	施設の概要
文化財	山崎町	山崎歴史郷土館	山崎町の古文書、考古資料等の収蔵と展示 (昭和 63 年(1988)設置)
		山崎歴史民俗資料館	旧龍野治安裁判所山崎出張所を活用し、山崎町の酒造道具を収蔵、不定期に公開(昭和 49 年(1974)移築)
	一宮町	宍粟市歴史資料館	一宮町の古文書、考古資料、歴史資料、民俗資料等の収蔵と展示(平成 12 年(2000)設置)
		家原遺跡公園	縄文・弥生・古墳時代、中世の建物を復元、公開、体験学習等に利用(平成 9 年(1997)設置)
	波賀町	波賀城史蹟公園	波賀城跡に二層櫓を作り、展望所として公開、説明パネル等を展示(平成 8 年(1996)設置)
		波賀歴史伝承の家	江戸時代の古民家を活用し、建物公開、民俗資料の展示(平成 17 年(2005)移築)
	千種町	たたらの里学習館	千種町のたたら製鉄関連の古文書、歴史資料、考古資料、民俗資料等の収蔵と展示(平成 9 年(1997)設置)
		天兒屋たたら公園	市内最大規模の近世たたら製鉄遺跡である天兒屋鉄山跡(県指定)を整備(平成 9 年(1997)設置)
社会教育	山崎町	山崎文化会館	施設の管理、運営、文化振興事業の実施等
		生涯学習センター学遊館	生涯学習事業等の実施
	一宮町	一宮生涯学習事務所	各市民協働センター内にあり社会教育施設の管理や生涯学習事業等の実施
	波賀町	波賀生涯学習事務所	
	千種町	千種生涯学習事務所	
	山崎町	宍粟市立図書館	郷土資料や図書の収集、整理、保存、貸出、読み聞かせや読書に関する事業等の実施
	一宮町	いちのびあ図書室	
	波賀町	はがてらす図書室	
千種町	ちくさ図書館		
観光振興	一宮町	道の駅「播磨いちのみや」	地域の情報ステーション、地域住民の雇用の促進、観光情報の発信拠点、特産物の販売等
	波賀町	道の駅「みなみ波賀」	
		道の駅「はが」	
	千種町	道の駅「ちくさ」	



No	区分	施設名称
①	文化財	山崎歴史郷土館
	文化財	山崎歴史民俗資料館
	社会教育	山崎文化会館
	社会教育	宍粟市立図書館
②	社会教育	生涯学習センター学遊館
③	文化財	宍粟市歴史資料館
	文化財	家原遺跡公園
④	社会教育	いちのびあ図書室
	社会教育	一宮生涯学習の館
⑤	観光振興	道の駅「播磨いちのみや」

No	区分	施設名称
⑥	文化財	波賀城史蹟公園
	文化財	波賀歴史伝承の家
	社会教育	はがてらす図書室
	社会教育	はがてらす工房
⑦	観光振興	道の駅「みなみ波賀」
⑧	観光振興	道の駅「はが」
⑨	文化財	たたら里学習館
	文化財	天児屋たたら公園
⑩	社会教育	ちくさ図書館
⑪	観光振興	道の駅「ちくさ」

※生涯学習事務所を除く

図1-26 主な観光資源及び文化財関連施設  
(出典:『宍粟市観光マップ』に加筆して作成)

### 3. 歴史的背景

#### 3-1. 宍粟市の変遷

##### (1) 原始、古代

###### (縄文時代)

縄文時代は、およそ 15,000 年前から 1 万年以上もの間長く続いた時代で、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期に分けられています。この時代の人びとは石のやじりを使った弓矢や石槍を使って狩りをしたり、網で川の魚を捕ったり、山菜や木の実等の豊かな山の幸を収穫して食料とし、その煮炊きのため、縄文土器と呼ばれる縄目の文様がついた土器を使用しました。

市内における最も古い遺物は、波賀町上野で出土した旧石器時代末から縄文時代草創期のものでされる有舌尖頭器です。市内の縄文時代の遺跡は、その多くが市北部の山麓に広がる斜面や河岸段丘上にあることが特徴です。早期の土器が出土する遺跡は、三室口遺跡(千種町)、福野遺跡及び家原遺跡(市指定)(ともに一宮町)等があり、福野遺跡及び家原遺跡からはシカやイノシシを捕獲したと考えられる落とし穴が見つっています。前期の皆木神田遺跡(波賀町)から出土した黒曜石の原石は、分析の結果、島根県隠岐島産の可能性が高いとされ、また市内からはサヌカイト製の石器も出土しています。原石は市内では産出されないことから、当時に広範な地域との交流があったことを物語っています。

縄文時代中期の終わりから後期にかけて、遺跡の数は増加し、与位高尾遺跡(山崎町)、福野遺跡、家原遺跡では、床面の中央に石囲いの炉を持ち 2 本の柱で屋根を支えた竪穴建物跡が見つっています。

###### (弥生時代)

弥生時代は、紀元前 10 世紀後半から紀元 3 世紀中頃まで続き、この時代に稲作の技術が九州北部へ、さらに日本列島各地に伝えられました。また、鉄製の農工具を使い、銅鐸に代表される青銅器を使ったお祭りをを行うようになったのも弥生時代の大きな特徴といえます。

市域で確認された弥生時代の遺跡は、弥生時代前期のものとして鹿沢遺跡群(山崎町)、家原遺跡(一宮町・市指定)、大森遺跡(千種町・市指定)等があります。縄文時代から続いて河岸段丘の上であり、それぞれ地域の中心的な役割を果たしました。家原遺跡で



【市指定】家原遺跡

※写真は縄文時代の竪穴建物跡(一宮町三方町)



田井遺跡銅鐸形土製品  
(山崎町田井)

は30棟を超える竪穴建物跡が見つかっており、内陸交通の要地として、弥生時代を通じて揖保川最上流の拠点的な役割を占めていたと考えられます。

弥生時代中期から後期の遺跡は、川戸遺跡（山崎町）や神谷戒現行遺跡（山崎町）など、揖保川沿岸の自然堤防上に集落跡が確認されています。前期は洪水等が及ばない段丘上に集落を営み小規模な谷水田を開いていたのが、やがて河川沿いの低地に集落を構えて本格的な水田耕作を行うようになりました。川戸遺跡から出土した土器には、但馬、丹波、丹後等の北近畿地方や吉備・因幡地方の影響を受けたものが含まれ、当時の地域の関係や盛んな交流の様子を示しています。

なお、市内の4箇所より銅鐸が出土しています。須賀銅鐸（山崎町）は、江戸時代の寛政2年（1790）に出土したと当時の記録に残されていますが、現在、所在は明らかではありません。袈裟襷文銅鐸（閏賀銅鐸）（一宮町・県指定・（公財）辰馬考古資料館蔵）は、明治41年（1908）に伊和神社西方の揖保川を挟んだ山の中で発見されました。四区袈裟襷文銅鐸（青木銅鐸）（山崎町・県指定・文化庁蔵）は、昭和35年（1960）に丘陵斜面の開墾中に発見された古段階の銅鐸です。岩野辺（穴尾）銅鐸片（千種町）は、長さ18.6cmの鈕部分の破片で、昭和55年（1980）に棚田の整地中に発見されました。また、田井遺跡（山崎町）からは、体部に綾杉文を刻む高さ10.7cmの弥生時代中期の銅鐸形土製品が出土しています。銅鐸や銅鐸形土製品の出土は、それぞれの地域の政治的なまとまりを示すものと考えられます。

### （古墳時代）

3世紀中頃から7世紀にかけての古墳時代、各地の首長や有力な氏族は盛んに古墳を築きます。古墳には、円墳、方墳、前方後円墳等があり、その形や大きさは身分の違いや政治的役割を表すと考えられており、市域には多くの古墳が残されています。

生栖遺跡（一宮町）では、古墳時代初めの方形周溝墓が確認されています。伊和中山古墳群（一宮町・市指定）では、伊和神社の東南の小高い尾根の上に築かれた前方後円墳（1号墳）及び円墳や方墳を含む19基の古墳群が確認されました。1号墳は、4世紀末から5世紀初頭に築かれたとされており、揖保川上流域において、因幡や但馬方面からの交通路を掌握し、畿内政権との結びつきを強めた地域首長の墓と考えられます。

また、祭祀に関わる遺物が出土した伊和遺跡（一宮町）は、伊和大神を祭る伊和君氏と



【市指定】伊和中山古墳群

※写真は発掘当時の1号墳竪穴式石室（一宮町伊和）



伊和中山1号墳出土銅鐸

（一宮町伊和）

の関係が注目されるどころです。その他、<sup>かなややまべ</sup>金谷山部古墳（山崎町・県指定）は中期、伊和神社南方の一つ山古墳（一宮町・県指定）は中期後半に属する、いずれも平野部に築かれた直径20m前後の円墳です。

古墳時代後期になると、山崎町、一宮町及び波賀町の各地に横穴式石室を持つ群集墳が築られました。<sup>みつづ</sup>三津群集墳（山崎町）は、5基の古墳が発掘調査され、多量の須恵器や大刀、刀子、鉄鏃等の鉄器類や耳環、玉類等が出土したほか、この地域では他に例のない<sup>くつわ</sup>轡、<sup>みずお</sup>水緒、<sup>しおで</sup>鞍等の馬具類の出土が注目されます。

古墳時代の集落跡は、河東南遺跡、神谷戒現行遺跡、上比地森ノ上遺跡、生谷西垣内遺跡（いずれも山崎町）、及び伊和遺跡、家原遺跡（市指定）、福野遺跡、森添遺跡（いずれも一宮町）等で竪穴建物跡が確認されています。集落遺跡の周囲には後期群集墳が分布し、居住域と墓域から構成される集落（ムラ）の様子を示しており、古代以降の地域を形づくる基盤となったと考えられます。

### （奈良時代）

7世紀後半から中国・唐の政治制度を模範とする律令国家の建設が進み、8世紀初頭に平城京が築かれた奈良時代には、天皇を中心とする中央集権的な国家体制が整えられました。諸国は畿内と七道に分けられ、その下に国、郡、里（のち郷）を設け、国には国府、郡には郡衙と呼ばれる役所が置かれました。

和銅6年（713）、朝廷は諸国に対して、郡・里に縁起の良い字を用いること、郡内の産物、地名の由来、土地の状態、古老が伝える伝説等を調べて報告することを命じました。

『播磨国風土記』は、命令後間もない霊亀元年（715）頃までに作成されたと考えられています。宍粟は「宍禾」と表記され、<sup>しきわ</sup>孝徳天皇の時代に揖保郡を分けて宍禾郡を作ったとされています。伊和大神がこの地で舌を出した大きな鹿<sup>しし</sup>と出会ったことから、シシアワ（鹿に逢うという意味）と名づけられたとされ、シシアワがのちにシサワに、さらにシソウと変化したといわれています。また、「宍」は肉、「禾（粟）」は穀物を表す字であることから、狩猟と農耕が盛んであったことに因むともいわれます。

郡内には<sup>ひじのさと</sup>「比治里」「<sup>たかやのさと</sup>高家里」「<sup>かしわのさと</sup>柏野里」「<sup>あなしのさと</sup>安師里」「<sup>いしつくりのさと</sup>石作里」「<sup>うるかのさと</sup>雲箇里」「<sup>みかたのさと</sup>御方里」の七つの里が置かれ、これが現在の本市の地域の枠組の母体となっています。『播磨国風土記』に記された地名には、比治（上比地、中比地、下比地）、雲箇（閏賀）、御方（三方）など、1,300年以上経った現在に引き継がれているものも多くあります。

『播磨国風土記』には多くの神々が登場し、なかでも伊和大神にまつわる説話が播磨

<b>比 治 里</b>	山崎町城下・戸原地区、新宮町平見
<b>高 家 里</b>	山崎町中心部・蔦沢地区
<b>柏 野 里</b>	山崎町菅野・土万地区、佐用町三河地区、千種町全域
<b>安 師 里</b>	山崎町須賀沢、安富町全域
<b>石 作 里</b>	一宮町神戸（南部）・染河内地区、山崎町神野・河東地区
<b>雲 箇 里</b>	一宮町神戸（北部）地区、波賀町全域
<b>御 方 里</b>	一宮町三方・下三方・繁盛地区

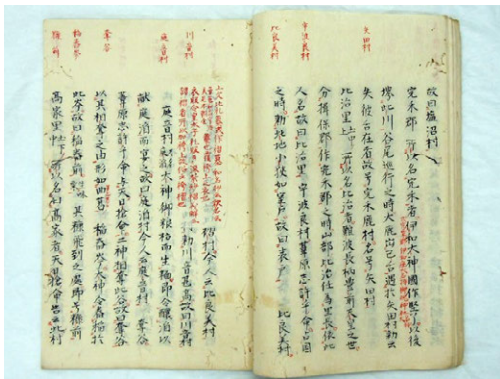
図1-27 『播磨国風土記』の宍禾郡の七つの里と現在の地名

地方に広く伝わっています。特に宍粟では伊和大神の催した宴に米が発酵してできた酒が用いられたとの記述があり、文献としては最古級の酒づくりに関する内容といわれています。伊和大神を奉斎した氏族は、揖保川上流域を本拠としたと考えられており、播磨地方における、この地の歴史的重要性を物語っています。

奈良時代に創建された播磨千本屋廃寺跡（山崎町）は、市域で確認された唯一の古代寺院で、塔跡及び金堂跡、講堂跡と考えられる遺構が確認されています。家原遺跡（一宮町・市指定）からは掘立柱建物跡、土器を大量に廃棄した土坑（穴）等が見つかりました。墨書土器や転用硯等の出土物から、当時、御方里を治めた公的な施設と考えられます。また、かつては山崎町の平野部にあたる城下、戸原、河東地区等において条里地割の痕跡が認められていましたが、ほ場整備等により大半の条里景観は失われています。

『播磨国風土記』の記事や飛鳥池工房遺跡（奈良県高市郡明日香村）及び藤原宮跡（奈良県橿原市）、平城京跡（奈良県奈良市）等の出土木簡から、当時この地に、伊和君氏、山部氏、丸部氏、神人部氏、出雲部氏、日奉部氏等の古代氏族が居住していたことがわかります。

また同記事には、柏野里の敷草村、御方里の金内川で鉄が産出されたという記事があり、奈良時代初めには鉄づくりが行われていました。



『播磨国風土記』宍粟郡の条  
(いまほり本・個人蔵)

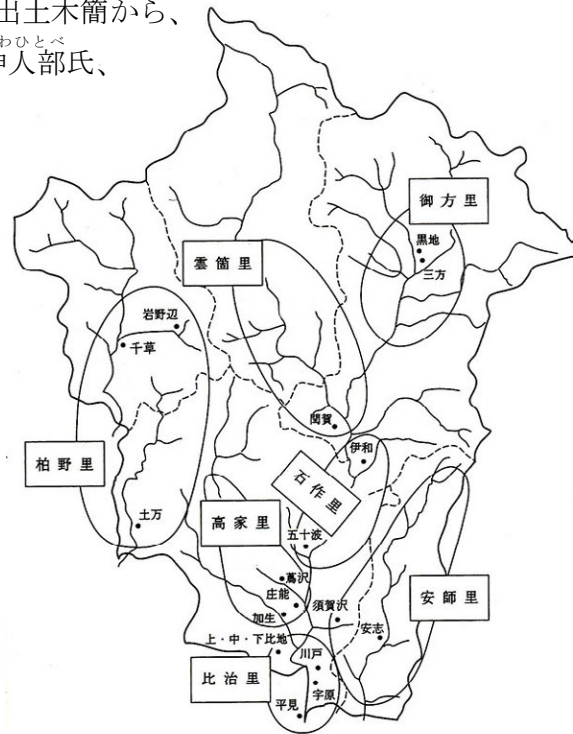


図1-28 『播磨国風土記』に示す宍粟郡の里  
(出典:『安富町史』を元に作成)

（平安時代）

8世紀末から12世紀の平安時代は、中央の貴族が政治の実権を握り、特に9世紀の中頃から、藤原氏が勢力を強めていきました。貴族の生活から、かな文字や『源氏物語』に代表される文学といった日本独自の文化が生まれています。各地に貴族や有力な神社、寺院等が所有する荘園が置かれると、荘園の権利や利益をめぐる争いや対立が生じ、やがて武士が登場しました。

奈良時代の宍粟郡の里は「比地郷」「高家郷」「柏野郷」「安志郷」「石作郷」「伊和郷」「三方郷」「土万郷」に再編されました。平安時代に成立した荘園には、「石作荘」（山崎町）、「三方荘」（一宮町）、「蟾原荘」及び「伯可荘」（ともに波賀町）が知られています。

平安時代中期に編纂された『延喜式』には、播磨国の名神大社である伊和坐大名持御魂神社（伊和神社）（一宮町）をはじめ、御形神社及び庭田神社（ともに一宮町）、雨祈神社及び与比（與比）神社、大倭物代主神社（ともに山崎町）、邇志（迺志）神社（波賀町）が記されています。

安積山遺跡（一宮町）で、平安時代末期の大規模な製鉄遺跡が見つかりました。製鉄炉跡には大型や小型のものがあり、現在確認された本市で最も古い時期の鉄生産に関わる遺構であり、西播磨地域でも最大規模の古代製鉄遺跡です。

表1-2 「倭名類聚抄」(承平年間(931～938))に記す宍粟郡の郷

比地郷	『播磨国風土記』の比治里を引き継ぐ。
高家(多以恵)郷	『播磨国風土記』の高家里を引き継ぐ。
柏野(加之八乃)郷	『播磨国風土記』の柏野里を引き継ぐ。
安志郷	『播磨国風土記』の安師里を引き継ぐ。
石作り(以之都久利)郷	『播磨国風土記』の石作里から伊和村を除く。
伊和郷	『播磨国風土記』の雲箇里に伊和村を加える。
三方(美太)郷	『播磨国風土記』の御方里を引き継ぐ。
土方(比知末)郷	平城宮跡出土木簡にみえる余部里 <small>あまりべのさと</small> が土方郷となったと考えられる。

## (2) 中世

### （鎌倉時代から室町時代）

13世紀から16世紀にかけて、中世の地方社会には、貴族や有力な社寺等の私的所有地である荘園と、国司の支配下にある公領（国衙領）が存在しました。市域において中世に成立した荘園、公領として、「高家荘」及び「柏野荘」（いずれも山崎町）、「三方（東）荘」（一宮町北部）、「三方西荘」（波賀町南部）、「千草村」（千種町）、「比地御祈保」（山崎町南部）、「野口保」（山崎町北東部）、「安積保」（一宮町南部）等があります。家原遺跡（一宮町・市指定）や生栖遺跡で検出された鎌倉時代の掘立柱建物群は、三方（東）荘における政所と呼ばれる荘園の中心的施設に関連する遺構とみられ、中国製の青磁や白磁等が出土しています。瀧ノ内経塚（一宮町）は、末法の後まで伝えることを願い、銅製の筒に入れた経典を地下に埋納した遺構です。

中世以降、豊富な森林資源の開発が進み、京都等の大建築の用材の供給地となり、揖保川を利用して搬出されました。また、市内で産出された鉄は刀剣の原料として珍重されました。小茅野後山遺跡（山崎町）や小野段林遺跡（波賀町）、高保木製鉄遺跡（千種町・県指定）で中世の製鉄炉跡が発掘され、当地で古代から連綿と鉄生産が続けられてきたことが判明しています。大永7年（1527）に建てられた御形神社本殿（一宮町・国指定）は、檜皮で屋根が葺かれ、柱上部の組物等に室町時代の神社建築の技術や意匠を伝える貴重な建造物として知られています。

平安時代に貴族に仕える身分だった武士が、中央政治に強い影響力を持つようになり、12世紀後半に平氏政権が隆盛を誇った後、それを滅ぼした源頼朝が鎌倉幕府を開き征夷大將軍に任じられました。その後、元弘3年（正慶2年）（1333）、後醍醐天皇の呼びかけ

に応じた足利尊氏、新田義貞らの活躍により幕府は滅亡します。後醍醐天皇による建武新政のもと、播磨国司であった新田義貞は、天下泰平を祈願して、伊和神社に土地や神戸郷の郷司職（郷をおさめる役職）を寄進しており、同社の近くには義貞が寄進し、江戸時代に鋳直されたという梵鐘（一宮町・市指定）も残されています。伊和神社は、播磨国一宮として広く崇敬され、多くの武将から信仰を集めました。

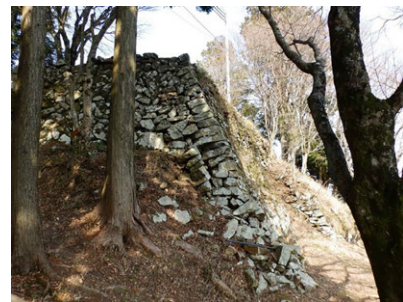
のち、後醍醐天皇（南朝）と対立した足利尊氏は、光明天皇（北朝）を立てて征夷大將軍となり、南北朝の動乱を経て室町時代を迎えます。この時代、播磨国では赤松氏が室町幕府の下で守護大名となり、安積氏など宍粟郡の在地有力者や伊和神社との関わりを深めていきましたが、嘉吉の乱（1441）で滅亡したため、宍粟郡は山名氏が支配するところとなります。

### （戦国時代）

戦国時代になると、播磨国の支配を回復した赤松氏の同族である宇野氏が、長水城・篠ノ丸城（ともに山崎町）を拠点に宍粟郡一円へと勢力を強めます。宍粟郡は但馬国、因幡国、美作国と境を接する軍事的に重要な位置にあり、塩田城跡（山崎町）、岡城跡、御形山城跡、草置城跡（いずれも一宮町）、波賀城跡（波賀町・市指定）、千草城跡（千種町）といった多くの山城跡が残されています。宍粟郡北部の在地有力者であった安積氏、



図1-29 宍粟市周辺の  
中世後期の在地有力者、社寺、荘園等分布



長水城跡 主郭(本丸)の石垣隅部



篠ノ丸城跡 主郭(本丸)の正面



篠ノ丸城跡測量図

田路氏、中村氏らは、他国との境目にあつてそれぞれに活動し、宍粟安積家文書(一宮町・市指定)、田路家中世文書(一宮町・市指定)、中村家文書(波賀町)等を残しています。

天正8年(1580)、織田氏に敵対した宇野氏は、播磨の平定をはかる羽柴秀吉により滅ぼされ、宍粟郡の中世が終わりました。

### (3) 近世

#### (江戸時代)

宇野氏の滅亡後、宍粟郡は秀吉の家臣である神子田正治の領地となりました。天正12年(1584)に、黒田孝高が宍粟郡を与えられましたが、同15年(1587)に豊前国中津へ転じた後は、秀吉の正室北政所の甥で、龍野城主であった木下勝俊が当地を支配しました。勝俊は、当時の山崎村に新町申付書(山崎町・市指定)を下し、山崎の地に新しい町場を建設するため諸役(雑税)を免除し、近隣の商工業者の移住をうながしました。慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いで戦功のあった池田輝政が播磨52万石の領主となり、宍粟郡も領有するところとなりました。輝政は山田山崎町中にあてて市日の定書(山崎町・市指定)を下し、市日の設定とともに治安維持、古い商慣行の禁止、物資の集積、諸役(雑税)の免除等を通じて、経済活動を振興しました。慶長18年(1613)、輝政が没すると、一時岡山藩主池田忠継が宍粟郡を領有しますが、元和元年(1615)、輝政の四男の池田輝澄によって3万8千石の宍粟藩が立てられます。宍粟立藩にあたり、木下勝俊の新町建設、池田輝政の経済振興策によって発展しつつあった山崎の地に居城が構えられ、これを機に本格的な城下町の基礎が築かれました。この頃、山崎城下町の東方にある出石まで高瀬舟が通航できるようになりました。これにより、年貢米や麦、大豆、木材、薪炭、鉄等が揖保川を下って河口の網干まで運ばれるようになりました。出石の揖保川東西両岸には、石積みいだいしの舟着き場が築かれ、舟問屋や倉庫、茶屋、飯屋等が建ち並び、宍粟の商業、流通の拠点

表1-3 宍粟郡 近世前期の主な変遷

天正8年(1580)	羽柴秀吉の攻撃により、篠ノ丸城・長水城が落城する。神子田正治、宍粟郡を領有する。
天正12年(1584)	黒田孝高、宍粟郡を与えられる。
天正15年(1587)	龍野城主木下勝俊、宍粟郡を領有し、山崎村に新町を申付ける。
慶長5年(1600)	池田輝政、播磨52万石姫路城主となり、宍粟郡を領有し、市日の定を下す。
慶長9年(1604)	池田輝澄、輝政の四男として姫路城で生まれる。母は、徳川家康の次女、督姫。
慶長18年(1613)	池田輝政没し、岡山藩主池田忠継が宍粟郡を領有する。
元和元年(1615)	池田輝澄、宍粟藩3万8千石を立藩する。
寛永8年(1631)	佐用郡の加増により、宍粟藩6万3千石となる。
寛永17年(1640)	池田騒動により領地没収、輝澄は因幡国鹿野へ蟄居となる。松井松平康映、和泉国岸和田より6万石で入封する。
慶安2年(1649)	松井松平康映、石見国浜田へ転封し、宍粟郡は一旦幕府領となる。岡山藩主池田光政の弟、恒元、3万石で入封する。
寛文2年(1662)	池田輝澄、鹿野の地で没する。
寛文3年(1663)	池田輝澄の嫡男、政直、神崎郡で福本藩1万石を立藩する。
寛文11年(1671)	池田恒元没し、政周が藩主となる。
延宝5年(1677)	池田政周没し、数馬(恒行)が跡を継ぐが、翌延宝6年(1678)没する。
延宝7年(1679)	本多忠英、大和国郡山より1万石で入封、明治維新まで本多氏が藩主となる。

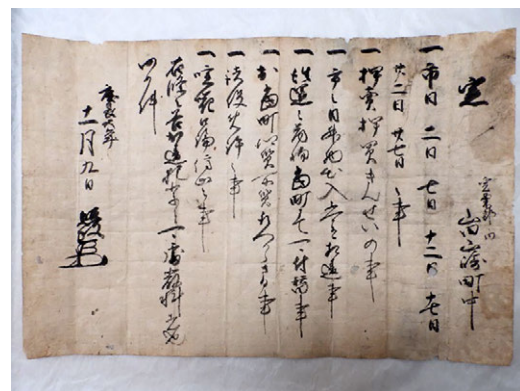
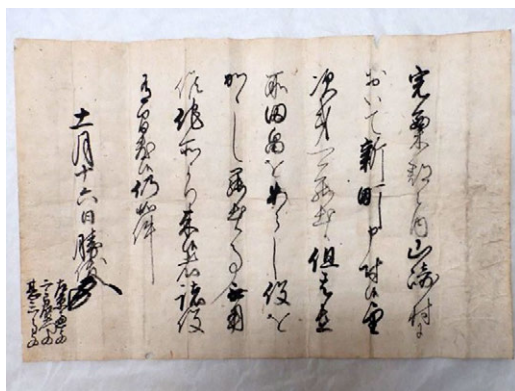
として発展しました。

寛永8年(1631)、佐用郡を加増され宍粟藩は6万3千石を領しましたが、後の寛永17年(1640)の家中騒動により領地は没収され、松井松平康映が和泉国岸和田から山崎に入りました。慶安2年(1649)に康映が石見国浜田へ転封し、一旦幕府領となった後、池田恒元が藩主となりましたが、後継の政周、恒行がともに早世し、延宝6年(1678)に宍粟藩は廃絶しました。延宝7年(1679)、大和国郡山より入封した本多忠英が1万石の山崎藩主となって以降は、本多氏の支配が続き、八代忠鄰の時に明治維新を迎えました。

山崎藩の陣屋は内堀に囲まれた本丸に建てられました。北に勘定所、二の丸の北側に番所、米蔵、作事場等が置かれ、周囲には武家屋敷が建ち並びました。外堀を挟んだ北側には、町屋や寺院からなる城下町が広がり、町役人による差配が行われました。在地の村々では庄屋、年寄、百姓代の村方三役のもと五人組が編成され、年貢納入をはじめ、相互扶助や治安維持といった村落の自治に大きな役割を果たしました。

本多忠英が山崎藩主となった時に、山崎町の一部及び一宮町、波賀町、千種町の全域は幕府直轄領(天領)となり、山崎町須賀沢に幕府領の支配や山林資源を管轄する山方役所が置かれました。元禄10年(1697)に三日月藩、享保元年(1716)に安志藩が成立すると、両藩の支配を受ける村が各地に生まれました。明和6年(1769)には、山崎町及び一宮町の一部で尼崎藩領となった村もありました。

近世は、幕府や藩の経済を支えるべく、全国各地で特性や資源を生かしたさまざまな産業が発達しました。宍粟北部の山間部では、幕府直轄領として良質な砂鉄と豊富な木炭を使用したたたら製鉄が盛んに行われました。天児屋鉄山跡(千種町・県指定)や荒尾鉄山跡(千種町・市指定)では、広い敷地に石垣を備えた棚田状の区画が設けられ、斜面の高い場所に製鉄炉が築かれた高殿跡、その下に鉄池や大銅場、元小屋(勘定場)、馬小屋、倉庫といった様々な生産施設が配置されました。周囲には金屋子神社、砂鉄小屋と炭小屋、山麓には操業の責任者である村下の屋敷や製鉄に従事するたたら師の山内小屋が整然と連なりました。たたら師は、1つのたたら場で数年間操業すると、燃料の木炭となる雑木を求めて山の中を移動するということを繰り返しました。宍粟の鉄山は、当初は千草屋及び英賀屋、龍野屋等の山崎の商人たちが競い合いましたが、やがて千草屋が独占し、次いで鳩屋が台頭するも、幕末になると大坂の泉屋等が経営に参加するよ



【市指定】山崎八幡神社文書「新町申付書」・「市日の定書」(山崎町門前・山崎八幡神社蔵)  
写真左:木下勝俊判物(新町申付書) 写真右:池田輝政判物(市日の定書)

うになりました。

江戸時代の人々は、正月や節句、盆等の年中行事や神社の祭礼等に楽しみや憩いを見出していました。信仰や祈り、娯楽、文化を示すものとして、神社に収められた絵馬や、和歌・俳句等の文芸作品が残されています。また、ろくろ挽きによる木工品生産を行った木地師の存在も知られています。山崎町蔦沢や一宮町三方の村々では紙漉きが行われていました。

幕末、尊王攘夷をかかげた浪士たちの倒幕の動きが盛んになり、文久3年(1863)には但馬国生野(現在の朝来市生野町)で沢宣嘉を総帥とする生野の変が起こりました。その際、挙兵に失敗した美玉三平や中嶋太郎兵衛らの浪士が宍粟方面に逃走し、山崎町木ノ谷で最期を遂げた事件は、人々に新しい時代の到来を予感させることとなりました。



出石の船着場跡(石出し)  
(山崎町中広瀬)



美玉・中嶋両氏の墓  
(山崎町木ノ谷)

#### (4) 近代、現代

##### (明治時代から大正時代)

慶応3年(1867)、徳川慶喜は大政を奉還し、ついで王政復古の大号令が発せられ明治の新政が開かれました。幕末から明治維新時の宍粟市域は、山崎町の一部、一宮町北部、波賀町及び千種町の全域からなる幕府の直轄領(天領)と、山崎藩、尼崎藩、三日月藩、安志藩の私藩領に分かれていました。山崎藩は明治2年(1869)に版籍を奉還し、九代藩主本多忠明はそのまま山崎藩知事に任命されました。

次いで明治4年(1871)の廃藩置県により私藩は廃止され、旧藩は山崎

表1-4 幕末、維新時の宍粟郡

山崎藩領	幕府領 (天領)	安志藩領	三日月藩領	尼崎藩領
右記以外 旧山崎町周辺全域	(安富地区) 皆河・瀬川 (一宮地区) 三方谷の全域・伊和の一部 (山崎地区) 中野・上ノ・須賀沢・三谷 (波賀地区) 全域 (千種地区) 全域 (旧三河村地区) 全域	(安富地区) 安志・三森・名坂・末広・栃原 (一宮地区) 須行名・東市場・上野田・能倉 東河内・構・杉田・東安積の一部	(安富地区) 長野 (一宮地区) 嶋田・西安積・閭賀・下野田 (山崎地区) 土万・今出・大沢・青木・大谷 上牧谷の一部・下野・蟹が沢 与位・杉ヶ瀬・木ノ谷・五十波	(安富地区) 塩野・植木野・三坂・狭戸 (一宮地区) 伊和の一部・安黒 (山崎地区) 上町・中町・清野・野々上

県、尼崎県、三日月県、安志県へと引き継がれ、県知事(県令)が中央から派遣されまし

た。相前後して、旧幕府の直轄領は生野県、兵庫県に再編されました。山崎県は、姫路県、飾磨県を経て明治9年（1876）8月に他の県と統合され兵庫県となりました。

明治5年（1872）の大区小区制により、飾磨県は16大区に分けられ、宍粟郡は第16大区、郡内は9小区に編成されました。明治11年（1878）の郡区町村編制法により宍粟郡役所が設置され、明治22年（1889）の町村制の施行によって、宍粟郡は1町18村となりました。江戸時代以来の伝統的な地域の単位であった村々は、各町村の大字として現在に引き継がれています。

宍粟郡役所は、初め山崎町本町に置かれていましたが、明治27年（1894）東鹿沢に移転しています。当時、山崎町には宍粟銀行、神戸村、西谷村、繁盛村等に小銀行、さらに宍粟勸業会が設立され、農業、林業、木炭業、養蚕業、畜産業等の様々な産業の発展が図られました。特に大正9年（1920）設立された郡是製糸株式会社山崎工場は莫大な利益をあげ、地域の生糸産業及び養蚕業の中核施設として、また近郷の若い女性の働く場として大きな役割を果たしました。

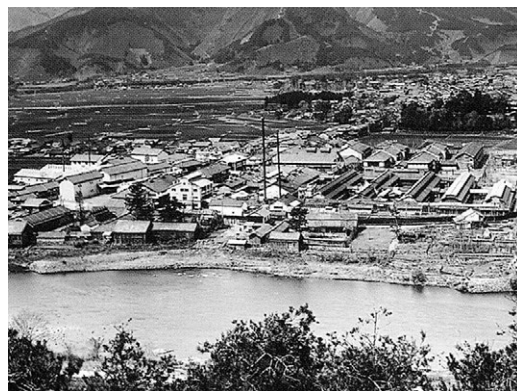
本市における本格的な製材業は、大正9年（1920）に水車を動力とした製材工場が創設されたことに始まります。奥深い森林で伐採された木材を集積し、幹線道路や貯木場まで搬出するために、機械のなかった時代には、人力や木馬きんまと呼ばれる木製の運搬具等が使用されましたが、木材の需要が増大するに従い、より近代的な搬出方法が求められるようになりました。そこで、波賀町において森林鉄道が導入されることになり、大正7年（1918）、建設工事が着手され、音水、赤西と上野貯木場を結ぶ幹線の延長24kmの他、カンカケ、坂ノ谷、万ヶ谷等の支線が敷設され、総延長は40数kmに及びました。また、木工業の技術向上のため、木工伝習所が開設され、後の林業試験場誘致へとつながりました。

また、古くは因幡街道として栄えた市域を縦断する幹線は、明治18年（1885）2月24日内務省告示第6号「国道表」において国道22号（東京より鳥取県に達する路線）と位置付けられ、その後の国道29号へと発展します。公共交通は、姫路自動車による山崎＝姫路間の乗合バスによる旅客輸送が大正7年（1918）に開始されました。

大正12年（1923）4月1日、郡制廃止に関する法律が施行され宍粟郡役所が廃止されると、各町村は県直轄のもとに治政を行うこととなります。



宍粟郡役所  
（出典：『宍粟のあゆみ』）



郡是製糸株式会社山崎工場  
（出典：『宍粟のあゆみ』）

## (昭和以降)

昭和 20 年 (1945) 8 月 15 日、太平洋戦争が終結し、昭和 21 年 (1946) 日本国憲法公布、昭和 22 年 (1947) 地方自治法の制定を経て町村制が廃止となると、昭和 28 年 (1953) の町村合併促進法の施行に伴い、宍粟郡各町村では合併に向けての気運が高まりました。昭和 30 年 (1955) の旧山崎町と近隣村との合併により山崎町が誕生し、続く昭和 31 年 (1956) に一宮町及び波賀町が誕生しました。昭和 35 年 (1960) には、千種村が町制を施行して千種町となり、以降およそ 50 年間にわたり 4 町の時代が続きました。

戦中、戦後の食糧難を経て、昭和 30 年代中期に、都市部で戦後復興住宅等の建設が最盛期となり、宍粟産木材の需要が激増しました。昭和 33 年 (1958)、引原ダム (波賀町) の完成等によって揖保川沿いの治水が安定し、農作物の増産も進みました。昭和 40 年代には、主要道路の改修整備により交通網が充実、さらに各家庭への電話架設も進み、地域の景気は好転し住民の生活圏は拡大しました。

昭和 20 年代まではかつての街道の名残をとどめていた国道 29 号は、昭和 32 年 (1957) から道路拡幅やバイパス化等の改築工事に着手し、昭和 42 年 (1967) の一次改築の完了により、山陽と山陰を結ぶ産業道路として大きな役割を果たしました。さらに、昭和 50 年 (1975) に中国縦貫自動車道山崎インターチェンジが開業し、道路網の高速化が進みました。公共交通は、昭和 4 年 (1929) に山崎町を中心に姫路、新宮、福崎、蔦沢、三方、上野、千種へのバス路線網が整備され、昭和 50 年 (1975) に津山～新大阪間の中国ハイウェイバスが開通し、京阪神との利便性が向上しました。

昭和 30 年代に入ると、木材のトラックによる輸送が主流となり、宍粟の近代林業の象徴的存在であった波賀森林鉄道は、惜しまれながら昭和 43 年 (1968) に廃止となりました。またその頃から、外国産の木材輸入増加の影響等により、林業が停滞していきました。

平成元年 (1989) には、宍粟郡が一体となり観光振興を図るため「しそう森林王国」を建国するなど、郷土愛と連帯感を育んできた 4 町は、それぞれの歴史的背景を大切にしながら、新しいまちづくりを創造すべく、平成 17 年 (2005) 4 月 1 日、合併により宍粟市として今に至ります。



かつての国道29号  
(出典:『宍粟のあゆみ』)



宍粟市開庁式

### 3-2. 災害史

本市は、市域の大部分が揖保川及び千種川の源流域から上流域の急峻な地形に囲まれ、度重なる風水害被害等に見舞われており、自然災害を受けやすい地域です。

以下に、本市が被災した主な自然災害の概要を示します。

#### (1) 風水害

##### 1) 千種町大水害（昭和 38 年（1963） 7 月）

昭和 38 年（1963） 7 月 10 日夜から降り続いた雨は、翌 11 日になっても降り止まず、千種川は増水、やがて岩野辺川から出た流木が真西橋の橋げたにつきまり、一気に水が町中へ流れ込みました。千種川本流に架かる橋は全て流失し、小学校や中学校をはじめ、町中が浸水しました。



真西橋の越水（千種町千草付近）  
（出典：『実粟のあゆみ』）

##### 2) 山津波（福知の山地崩壊、昭和 51 年（1976） 9 月）

昭和 51 年（1976） 9 月、西日本一帯に停滞していた寒冷前線が、台風 17 号の北上に伴って刺激され、8 日午後から降り始めて西日本一帯に大雨をもたらしました。

揖保川流域では、9 日から 11 日にかけて各地点で連日 150 mm 程度の降雨量を記録し、最大日雨量は下流部で 300 mm、総雨量は 600 mm に達し、揖保川の支川を中心に被害が相次ぎました。

上流部の一宮町福知では、大規模な山崩れ「山津波」が発生し、死者 3 名を出す大災害となりました。その他、家屋浸水 3,034 戸（床上 1,457 戸、床下 1,577 戸）、農地や宅地等の浸水 2,782ha、河川管理施設等の公共土木施設への被害など、影響は多方面に及びました。



「山津波」で押し流された校舎  
（一宮町福知付近）  
（出典：『月刊兵庫教育』2019年1月号）



山津波伝承碑（一宮町福知）

##### 3) 平成21年台風第9号局地的豪雨（平成21年（2009） 8 月）

平成 21 年（2009） 8 月 9 日から 10 日未明にかけて兵庫県西部及び北部を襲った集中豪雨は、時間雨量 70 mm を超え、市内各所に大きな被害をもたらしました。河川の増水で堤防、護岸が決壊し、家屋浸水やライフラインの寸断、市内主要道路の崩落や土砂崩れが発生し、交通網に大きな打撃を与えました。



一宮町安積 道路の被害状況  
（主要地方道養父実粟線）

表1-5 主な風水害の発生状況

(出典:「宍粟市地域防災計画」「宍粟市強靱化計画」を元に作成)

発生日月	災害名	気象要因	状況(主な被害状況等)
大 15. 7. 25	水害	大雨(雷雨)	宍粟郡山崎町附近浸水家屋10戸。
昭 3. 6. 24	水害	大雨(低気圧)	宍粟郡では橋流出、田畑被害あり。
昭 13. 7. 3～5	水害	大雨(梅雨前線)	千種の諸川著しく氾濫。道路、橋梁、堤防の流失、決壊等。
昭 16. 8. 15	風水害	大雨、強風(台風)	宍粟郡16町歩浸水。
昭 17. 8. 27～28	風水害	大雨、強風(台風)	宍粟郡三方村で橋梁流失1ヶ所、井堰流失2ヶ所。
昭 18. 9. 20	水害	大雨(熱帯低気圧)	宍粟郡戸原村では病舎流失1戸、水田流失5町歩、冠水田76町歩。西谷村では堤防決壊。
昭 19. 9. 4	水害	大雨(低気圧)	宍粟郡三方村では橋梁流失3ヶ所、井堰流失3ヶ所、田畑冠水5町歩。
昭 20. 9. 17～18	風水害	枕崎台風	宍粟郡の各村で堤防決壊や橋梁流失、道路破損、田畑流失・冠水、家屋被害等が発生。神戸村では死者1名、家屋被害298戸、耕地冠水80町歩。神野村では家屋流失6戸、浸水200戸、水稻無収穫7町歩。
昭 20. 10. 8～11	風水害	大雨、強風(低気圧)	宍粟郡城下村では堤防道路決壊7ヶ所、家屋被害32戸。下三方村では橋梁流失6ヶ所、道路決壊22ヶ所。三方村では堤防決壊6ヶ所、田畑埋没4町歩。千種村では家屋流失4戸、倒壊5戸、田畑流失・冠水等。
昭 21. 6. 18～19	水害	大雨(前線)	宍粟下三方村では家屋被害18戸、道路破損5ヶ所等。
昭 22. 7. 9	水害	大雨(熱帯低気圧)	宍粟郡河東村では堤防決壊60ヶ所。下三方村では家屋被害10戸、道路破損3ヶ所、堤防決壊3ヶ所、耕地被害5町歩、橋梁流失2ヶ所等。
昭 23. 9. 10	水害	大雨(雷雨)	宍粟郡河東村では橋梁流失5ヶ所。下三方村では家屋被害7戸、道路井堰破損各2ヶ所、堤防水路決壊2ヶ所。
昭 24. 6. 19～20	水害	大雨(梅雨前線、デラ台風)	宍粟郡下三方村では家屋被害8戸、道路破損4ヶ所、井堰決壊1ヶ所、耕地被害6町歩、橋梁流失2ヶ所。
昭 24. 9. 18～20	水害	大雨、雷(雷雨)	宍粟郡戸原村では家屋流失20戸、同浸水200戸、水田流失7町歩、護岸決壊800米、山崩200町歩。
昭 26. 7. 8～15	水害	大雨(梅雨前線)	宍粟郡戸原村一田畑被害65町歩。三方村井堰流失1。土万村一田畑被害5町歩、倒伏による稔実不良126石。
昭 38. 7. 10～11	水害	大雨(梅雨前線)	梅雨前線の停滞と低気圧の影響による大雨により、県内各地で山崩れや河川の氾濫が発生。千種川に係る橋梁が多数流失した他、県内被害状況は死者4名、家屋被害多数、床上浸水524戸、床下浸水926戸等。
昭 51. 9. 8～13	水害	大雨、強雨(台風第17号)	兵庫県南西部を中心に記録的な大雨(総降水量は県中部で500mmに達する)が降り、一宮町福知地区で大規模な地すべりが発生し死者3名、全壊流失家屋40戸に及ぶ大災害になった。県内被害状況は死者16名、行方不明者3名、負傷者41名、家屋全壊124戸、床上浸水17,042戸、床下浸水57,412戸等。
平 5. 7. 27～28	風水害	強風、大雨(台風第5号、成層不安定)	台風が日本海へ抜けた後、南から暖湿流が入って県南西部を中心に大雨が降った。28日夜半過ぎに千種町で鉄砲水が起こり、車庫兼物置が直撃を受けて跡形もなく壊れた。
平 21. 8. 9～10	洪水害 浸水害 山がけ崩れ害 強雨害	大雨、強雨(台風第9号、暖気の移流)	台風による南からの暖かく湿った空気が近畿地方に流れ込み、兵庫県西部・北部に大雨をもたらした。宍粟市の被害状況は負傷者4名、住居全壊18戸、大規模半壊26戸、半壊98戸、床上浸水63戸、床下浸水354戸等。 千種町河呂の農村歌舞伎舞台(県指定)では、基礎部の石積の一部と法面が崩落した。また一宮町の閏賀区有文書が水損した。
平 30. 7. 5～8	浸水害 洪水害 山がけ崩れ害	大雨、強雨(梅雨前線)	梅雨前線の影響により県内では5日朝から7日朝にかけて断続的に大雨となった。宍粟市の被害状況は死者1人、住家全壊2戸、大規模半壊1戸、半壊1戸、一部損壊5戸、床上浸水7戸、床下浸水73戸等。 千種町西河内の天児屋鉄山跡(県指定)では、遺跡公園内に土砂が流入、石垣の一部が崩落した。

## (2) 雪害

降雪量の多い市北部は、雪害が多くみられます。昭和 38 年（1963）1 月には、「三八豪雪」と呼ばれた北陸地方から兵庫県北部にかけての記録的な豪雪となりました。昭和 51 年（1976）1 月には、昭和 38 年以来の豪雪に見舞われ、波賀町の戸倉峠で 2m 近い積雪がありました。

昭和 59 年（1984）の大雪では、戸倉峠で累加降雪量 13.71m を記録し、家屋の倒壊や死傷者を出すとともに、市内の各所で交通障害が発生しました。平成 7 年（1995）にも累加降雪量が 10m を超える記録的な大雪となり、「平成 8 年西播磨大雪」と名付けられました。

近年では、平成 29 年（2017）2 月に兵庫県北部を中心に大雪となり、県内で死傷者 4 名、家屋の一部損壊 6 棟の他、農林水産施設等の被害や交通機関の乱れ等の大きな被害が発生しました。また、令和 5 年（2023）1 月には県内の広い範囲で降雪となり、農業施設の被害多数の他、一宮町の県道で倒木が発生しました。

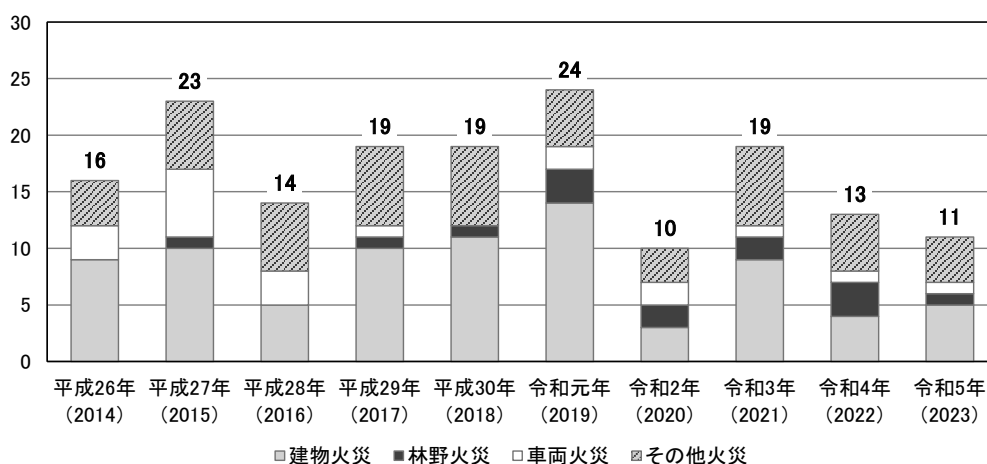


令和5年(2023)大雪の様子  
(波賀町道谷)

## (3) 火災

本市において発生した火災は、年間 15～20 件程度で推移しており、その半数は建物火災です。近年、市内の文化財建造物等が被災した火災は発生していませんが、文化財の損失を防ぐべく、防火対策の徹底や啓発に取り組む必要があります。

また、全国的に林野火災が増加傾向にあるなか、本市でもたき火の不始末等による林野火災が毎年 1～2 件発生しています。林野火災は、ひとたび燃え広がれば、貴重な森林資源を大量に焼失し、回復には長い年月と多くの労力を要します。動植物をはじめ自然環境への影響は甚大であることから、予防対策の徹底が求められます。



※「その他火災」は空地、田畑、道路、河川敷、ごみ集積場等の火災。

図1-30 火災件数の推移  
(出典：西はりま消防組合消防年報を元に作成)

#### (4) 地震

兵庫県の陸域の浅い場所で発生した地震の中で、記録に残る最も古い地震は、貞観10年(868)7月に発生した播磨国地震です。この地震は山崎断層帯を震央とし、マグニチュード7以上と想定され、平安時代の歴史書である『日本三代実録』によると、播磨国司からの報告として「地大いに振動し、諸郡の官舎、諸定額寺の堂塔、皆ことごとく顛倒す」と記述されています。宍粟防災センターに展示する山崎断層帯のはぎ取り標本には、播磨国地震により動いたとされる断層の跡を見ることができます。

近年では、昭和59年(1984)5月に山崎断層帯主部(北西部)の暮坂峠断層を震源とする震度4の地震が発生しており、地震調査研究推進本部による調査では、今後30年の間に山崎断層帯主部(北西部)において地震が発生する確率を0.1%~1%として、我が国の主な活断層の中ではやや確率が高いグループに属すると評価されています。

表1-6 兵庫県内で震度6以上の揺れがあったと推定される地震

(出典:寺脇弘光『兵庫県地震災害史』及び『宍粟市地域防災計画』『宍粟市強靱化計画』を元に作成)

番号	発生年月日	推定規模 (M)	名称等
1	868. 8. 3(貞観 10. 7. 8)	7.0 以上	播磨国地震 山崎断層帯主部(北西部)の活動
2	887. 8. 26(仁和 3. 7. 30)	8.0~8.5	仁和(南海)地震
3	1596. 9. 5(文祿 5(慶長 1). 7. 13)	7.5	慶長伏見地震
4	1864. 3. 6(文久 4(元治元). 1. 28)	6 1/4	
5	1916. 11. 26(大正 5)	6.1	
6	1925. 5. 23(大正 14)	6.8	北但馬地震
7	1927. 3. 7(昭和 2)	7.3	北丹後地震
◎ 8	1995. 1. 17(平成 7)	7.3	兵庫県南部地震
9	2013. 4. 13(平成 25)	6.3	淡路島地震

※番号列の◎は県内で震度7と推定される地震。

※「鎮増私聞記」では応永19年(1412)に播磨国で大きな地震が発生したとされています。

